



增補  
三  
依州案時記彙考  
四





增補 俳諧歲時記草

江戸 曲亭主人纂輯 藍亭青藍增補

冬

漢書律曆志 太陽者北方也 伏也 陽氣伏於下 於時為冬 冬終也 物終藏乃可

額頊

帝○魏相曰 北方之神 額頊乘坎執權司冬 玄冥神

月令 冬月其帝額頊其神玄冥 玄冥額頊黑精之君 玄冥水官之臣 少皞氏之子 曰脩曰熙 相代為應鐘 律月令廣義 鐘者動也 言水官物應陽而動下藏也

立冬

同上 孝經緯云 霜降後十五日斗指乾為立冬 十月節 冬終也 萬物皆收

藏 小雪

同上 立冬後十五日斗指亥為小雪 十月中 天地積陰 溫則為雨 寒

則為雪 時言者寒 未深而雪未大也 孟冬 廣韻 孟冬也 始也 冬始故曰孟冬

折木

通俗志作折木 誤矣 當作折木 禮記 鄭玄注 孟冬者日月會於折木之律

冬





この説異端小近し、出入雲ふ事あり、  
 一天下のうち何ぞ神あり、十月あり、  
 呂翁の説、神無月、雷無月、十月、純陰の月、  
 八雷の声收り、故に、六月を雷鳴月とい  
 ふ、對する、これ古人未發の論あり、雷と神との  
 一、一、萬葉小神の如聞つる瀧とよめ、後撰集  
 ちを、神のありぬ我中の雲ぬらうふ、  
 ゆ、の、詠る、雷神、又伊勢物語、神さへのみ  
 ち、又云、神さへ、云、此外證歌多し、〇青  
 藍、三世謬問答、此月と神無月と申、伊弉册尊  
 崩、六月、神、云、貝原篤信翁、此月、卦  
 お、坤、純陰事を用ひて、陽未復、陽無の月、  
 神、陽の靈陽、あき、と神さへ、云、  
 とも、荷田大人の説、至當といへ、此月諸神出雲國  
 へ、集り、あふ、故、神無月といふ、説、甚、  
 とも、能、諸、趣、の、さ、み、  
 五元集、高砂、祢宜、の、  
 湯治、の、神無月、其角、

**十月黄鐘**

律月令仲冬月律中黄鐘高誘

注云鍾衆也陽氣聚于黄泉

**大雪**

節月令廣義孝經緯云小雪後十  
 五日斗指壬為大雪十一月節

**仲冬**

月令仲冬之月

**復月**

五月一陰生  
 至十一月一

**暢月**

禮記注暢克也言

言積陰為雪至  
 此栗烈而大矣  
 通鑑云武王既勝殷乃改  
 正朔以建子月為正月  
 陽生是謂一陽來復  
 故以此月稱復月乎  
 以此月万物皆克實於內故也朱氏謂陽久屈  
 而後伸故曰暢月也淮南子命曰暢月注云以  
 民人無事間  
 暢故曰暢月  
 雪見月  
 淮南子仲冬之  
 命曰幸月  
 天正月

**幸月**

淮南子仲冬之  
 命曰幸月

**神樂月**

藏王  
 の言居の神樂月

冬

たのこも葉の音のこもき定家○露水云陽文  
中つらこと神の岩戸より出らふ比して神樂と奏せ  
る月とらふりしきまで此月五節の舞をこめあり又東  
三条の御神樂ホと行はるる名づけしきあり  
霜降月 霜降り月の空うらや雪けこもえし曇り  
蔵王風 蔵王の風

十二月大呂

律高秀注呂侶也萬物萌動于  
下未能達見所以配黃鍾助

陽宣 節月令廣義孝經緯云冬至  
也小寒 後十五日斗指癸為小寒 大

寒 中同上小寒後十九日斗指丑為大寒 季冬 月令季冬

臘月 說文冬至後三戌為臘祭百神也漢以  
戌日為臘魏以辰日晉以丑日 禮傳臘

者獵也因獵取獸以祭先祖 蔡邕獨斷 涂月 臘者歲終大祭也故小臘月とらふ

月令斗建丑之 夏以十三月為正殷以  
辰一日涂月 殷正 十二月為正周以十一

月為正故有 周年 文選舞鶴賦節陰殺節急  
殷正之名 景周年云周年年の周落

急景 月令廣義窮冬 窮月 禮記季冬  
意 日景短急云 之月日窮

千次月窮干紀星廻干天數將幾終注云日月  
星辰運行至此皆速故處也次舍也紀猶會

霜蟾 蟾ハ月中ハ蟾蜍ありといふより月の事と蟾  
とらふ霜蟾ハ霜夜の月の事ハ霜降とら

あれ秋冬の月皆霜蟾といへし陳與義が秋夜詠  
月詩ハ映霜蟾といへし秋の月ハ限らじ

殊更十二月の異名の十不雜て増山の 弟月 此月  
井不出せり翰墨大全の意不審也

年中月の終あり故小俗ふこ子月といへし 春待月  
和の諺ハ末の子ここ子と称すれ

蔵王 これてのこも身ふらふ丸 梅初月 蔵  
と云待月ののこもきこの長明

冬 い

花ハまことちむむえごうとほのこまて  
梅もつ月のころりりあめく頭昭  
三冬月 蔵玉

いそふつもの雪のはらるる定家

**十月** 亥の子 けの部玄猪の 射場 いむ  
余下小注と

**始** 公事根源 先此月の三日小左右衛門弓場の棚と  
始 はつらふ その日ハ天子を殿み出させひて弓を

御覽まらせ公卿以下束帯きてこれをいひ天子御射  
席をもちせて弓矢と御座の左右のこまふあてらふ是  
と群臣もいひて弓と射あふあり哉ハ文武二ツ  
の道ハ一とくくづらざる故ハ武をあらもせむあやう  
○江次第ふ十月五日射場始注藏人  
式七日ハ五日ハ残菊の宴ふあて

**凍** 字景孟冬 江湖の産魚ハ大き  
始て凍る 鮓 るりの漸一寸五分寸小満るもの

多し頭口大きく尾細しこれを煮食ふ腥く佳品  
らど冬月和尔堅田地の漁人多くこれを取賤民賞

一と饌も 猿蓑集 時雨きや 方葉伊沙那  
並ふいふいふいふ船 千律師 今いふく

ちらありのうへはら **十月** 卒川祭 上旬日夏の  
あて射てししと この部

三枝祭の **十二月** 忌日御飯 朔日 公事根源六  
条もくし 月ふおれ

鯛の頭枕 せの部節分 いぬの年 詩經 亦莫

**十月** 爐開 開きとらふ又茶人も炉開き会

**進** 爐炭 暖爐會 事文類聚 十月の朔有司  
暖爐炭と進民間置酒して

暖炉会とま 呂原明歳時雜記 京人十月朔酒と次  
て乃膏肉とが中不灸 團居して飲啗 此れを暖炉

会と **兼** 三冬物 爐 和漢三才圖會 地爐和  
これを用人尺爐と 名炭櫃の畧茶湯ふ

糸方一尺四寸 **十二月** 臘日 風俗通 礼傳  
冬 云夏ふ嘉平と

のい般イハ小清祀といふ周イハ大蜡イハといひ漢改イハて臘イハといふ臘イハの  
獲イハより獸イハを獵し取て先祖イハを祭るイハ説文イハ文至の後  
三戌臘イハ百神と祭る徐錯イハ曰臘イハ八粥イハ粥イハの部イハ臘イハ糟イハ  
臘イハ合イハ諸神と合イハせ祭るイハ臘イハ八粥イハ粥イハの部イハ臘イハ糟イハ

蜜蠟イハ似イハとイハ故イハ此名イハと得イハ天和本草イハ蠟梅イハ近年中華  
よりやイハ臘月イハ小黄花イハと開イハ蘭イハの香イハ似イハとイハ葉イハ  
梅イハの葉イハ似イハてイハ小イハ樹イハてイハ長イハしイハ木イハの高イハ二イハ三イハ尺イハ四イハ五イハ尺イハ了イハ  
過イハをイハ大イハ坂イハよイハてイハ唐イハ梅イハといイハふイハ梅イハのイハ類イハいイハわイハるイハをイハ臘イハ月イハ小イハ咲  
のイハ義イハいイハわイハるイハをイハ其イハ花イハ黃イハ蠟イハ色イハ鹿イハ賣イハのイハ部イハ葉イハ賣イハ  
似イハとイハ故イハ蠟梅イハとイハ名イハづイハくイハ鹿イハ賣イハのイハ部イハ葉イハ賣イハ

は十月拜墳イハ日イハ夢華錄イハ十月イハのイハ朔イハ都イハ城イハ  
のイハ士イハ庶イハ皆イハ城イハとイハ出イハてイハ墳イハをイハ

朝イハもイハ寒イハ食イハのイハ節イハのイハ如イハしイハ芭蕉イハ忌イハ士イハ日イハ俳諧イハ正風  
體イハのイハ開イハ祖イハ

芭蕉イハ菴イハ桃イハ青イハ翁イハのイハ忌イハ日イハありイハ泊イハ船イハ堂イハ杖イハ錢イハ子イハ是イハ佛イハ坊イハ  
風羅坊イハホイハのイハ号イハありイハ又イハ無イハ名イハ庵イハ幻イハ住イハ菴イハ蓑イハ出イハ庵イハ賦イハ竹イハ菴イハ

ホイハのイハ庵イハ号イハありイハ干論イハ為イハ辨イハ抄イハ著イハ考イハ故イハ翁イハのイハ推イハ名イハ金イハ作  
といイハふイハよりイハ伊イハ賀イハ小イハ四イハ姓イハありイハてイハ桃イハ池イハ黨イハの中イハのイハ松イハ尾イハ氏イハ  
ありイハとイハむイハのイハ俳イハ諧イハのイハ名イハ宗イハ房イハといイハふイハ落イハ髮イハのイハ後イハ桃  
姓イハのイハいイハきイハこイハりイハ桃イハ青イハとイハいイハふイハるイハるイハ梅イハ子イハ熟イハせイハるイハのイハ意  
ありイハとイハかイハらイハぬイハるイハ小イハ家イハ名イハとイハけイハるイハのイハいイハふイハるイハ十九イハの  
年イハ官イハとイハなイハるイハをイハきイハてイハ洛イハ陽イハ小イハ李イハ吟イハをイハ師イハとイハしイハ武陵イハ小イハ其  
角イハ嵐イハ雪イハとイハ門イハ人イハとイハせイハりイハ深イハ川イハのイハ芭イハ蕉イハ菴イハ小イハ隱イハ遁イハありイハとイハを  
三十六イハのイハとイハりイハありイハとイハ風俗イハ文イハ選イハ許イハ六イハ作者イハ列イハ傳イハ云イハ芭蕉  
翁イハ伊イハ賀イハのイハ人イハ武イハ名イハ松イハ尾イハ甚イハ七イハ郎イハ骨イハてイハ世イハ不イハ功イハとイハ遺イハえ  
とイハ武イハのイハ小イハ石イハ川イハのイハ水イハ道イハをイハ修イハしイハてイハ四イハ年イハ小イハ成イハるイハ速イハ不イハ功イハと

捨イハてイハ深イハ川イハ芭イハ蕉イハ菴イハ小イハ入イハるイハ年イハ三イハ十イハ七イハ支イハ考イハハイハ三イハ芭蕉イハ翁イハ  
正傳イハ藤イハ堂イハ家イハ藩イハ竹イハ二イハ坊イハ芭蕉イハ翁イハ桃イハ青イハ伊イハ賀イハ國イハ阿イハ拜イハ郡  
拓イハ植イハ村イハのイハ人イハありイハてイハ俗イハ称イハ松イハ尾イハ半イハ七イハ後イハ改イハてイハ松イハ尾イハ忠イハ若イハ工イハ門  
宗イハ房イハとイハ呼イハ正イハ保イハ元イハ甲イハ申イハのイハ年イハのイハ生イハれイハりイハてイハ弥イハ平イハ兵イハ衛イハ宗イハ清イハ示イハ清  
りイハ苗イハ裔イハありイハとイハうイハてイハ宗イハ房イハとイハ名イハづイハくイハ父イハのイハ名イハ儀イハ在イハ衛イハ門イハ母  
ハイハ豫イハ州イハ宇イハ和イハ島イハのイハ産イハ小イハ桃イハ地イハ氏イハのイハ娘イハありイハ支イハ考イハハイハ翁イハのイハ碑  
名イハ小イハ其イハ先イハハイハ桃イハ地イハのイハ黨イハとイハ也イハ今イハのイハ氏イハハイハ松イハ尾イハありイハハイハルイハとイハ書  
るイハハイハ母イハのイハ氏イハとイハ聞イハあイハるイハしイハものイハくイハ弥イハ平イハ兵イハ衛イハ宗イハ清イハ示イハ清イハ屋

冬は





とらふ別をて蛤の二見へりて行状を又江戸へ  
 帰つて諸門人正風の躰を勸む又洛へのりて去  
 来史邦元兆ホとよめる初まは猿の小菫とやけ  
 と吟づく猿菫と起も膳所の曲草正秀珍碩ホと  
 引導てひさこの俳諧あり大と趣き猿菫ふひとし  
 その後江戸へ帰て深川芭蕉庵と再びひびきふ許六  
 此時ふまゝも珍石江戸へ来つて深川集の俳諧と  
 撰と乗けの挑灯を朝風とて星川の  
 橋愚老が俳諧四五年の後ハミヤカをうむあると申  
 されり支考桃隣ハ随仕して江戸へ下つて挑隣ハ江  
 戸へ止り支考ハ松島象浮の旅へ趣き葛の松原を  
 撰て野坡利牛孤屋とてのうしく炭俵出来り  
 又江戸へて保生沾圃と勸め續猿菫と手傳て伊  
 賀へ歸る杉風錢別ハ別座敷と云俳諧あり下畧本朝  
 文鑑芭蕉翁終焉記其云此翁孤獨貧窮ありといへ  
 ども徳の風雅あり二千余人の門葉ありて夷洛  
 ひとふ合信する因と縁との不可思議いふを勤  
 破まて天和の頃あらん武江の草庵へ急火の難ふ

かともし潮ふひとる宮とらふて煙のうちふ生のびん

是ど玉の緒のとうりゆきとありあや爰も極如火宅の  
 夢と悟り應無所住の心を発ちて其次の年ハ甲斐の  
 山里へ身まてくし富士の雪のまてりて三月月  
 下入無我とらひく昔の風もあつてかたこの人々  
 嬉しくて焼原の旧草庵と結ばるるころとて  
 むご便りふとひく株の芭蕉と植置て鹽小雨と聞夜  
 うねといふ世ふは此時の吟まてい入のつらさ芭蕉翁  
 とも喚あり下畧此記ハ枯尾芭蕉ありて世不流希ハ此レ  
 惟然坊手記云翁難波ゆく芝柏亭ハ一集まて二約話  
 ありしが數日重食のひへ故う芳りあつて出席あり  
 俳句の贈らふ秋深き隣ハ何をまする人ぞ此夜より  
 腹痛の氣味少て泄瀉五行世のつひの淫あらんと思  
 ひて薬店の胃苓湯と服しあひまてい驗しとて三日  
 朔日二日とあつりしが次第不度數うまありて終り  
 かゝる愁といふふたり惟然支考内議していふ良  
 醫ありとも招き半と申られハ師曰我本元虚弱あり  
 るらえぬ醫不見せ侍とて薬方いつあらん我性ハ

冬は

木節あらで知るものあり、願くハ木節を急ふよびて  
見せしむらん去来と一同小よびを談をつきこ中存あり  
息をあらめ、京大津つをつらしむ、然るふ之道が  
亭ハ狭くして外ハ間所も多し、多人敷入るるて保  
養介抱もあり、其の所此軒と立廻り、我知る  
人ありて、御堂前南久太郎町、花屋仁左門、の者  
の裏座敷とかり受たり、間所も敷ありて、亭主の物  
敷寄ふ奇麗之諸事カ勝手まわし、其夜直ふ御介  
抱申て花屋ふらつりもひたり、此時十月三日、四日重肅  
畦止、舎羅何中ホハ師の不例とあらむ、之道亭ふ至じ  
小病（病）の事と聞え、ついで花屋ふまゐる、病氣不（不）  
ついで尋問の人ふらむ、さうふ坐席ふ還るはじと張紙  
と出さ、且仁左門が断ると云、三日廿七行、昼夜く、天気  
らとる、夜半過、去来きく、二日朝の状、三日の朝とく、  
其座より直ふちくち、伏見ふ出しハ巳の時ありし、夫より  
舟ふち乗八軒屋ふ著し、ハ亥の時ありしと、直ふ脚  
病床ふ恭（恭）し、小師も嬉しと胸ふせま、さうしハ

わのと宣（宣）し、諸國ふらむし人々ハ、我と親の  
如く思ひあふ、我老れて優（優）きともあられ、子の如  
く思ふ事あり、殊更汝ハ骨肉と受けし思ひあふ、  
三日見さる、十日のわひせり、さうふ此度か、遠き  
境より難治の憂ふ懼り、再會あり、思ひあふ、  
ふ逢見、さうの嬉しさを、袂とちわり、去来と  
さうり落る、さうぬぐひて云、僕世務ふ、まゐりま、  
させる實意も尽さる、御懇意の御意とかり  
ふ事、生と隔つとも忘却仕らむ、數行の涙ふせ、  
何様賣薬の効験いも、去来又消息、  
ためて飛脚便り、木節ふつ、支考手記、云同三日  
の夜子の時、ひつきて、木節来る、二日出の、雨人の消息  
この夜著せ、ゆゑ大津と互の時、一番舟ふ乗り  
し、短日故遲著、諸子ふさく、直ふ御容  
體と、御脈と診、至方逆挽湯と調合、四日  
朝、木節申さる、ふより、朝鮮人參半兩、道修町伏見  
屋より取、同く包香十五袋、天気より、之道  
より世話、洗濯老女と傭、師の御衣裳、その外連

中の衣裳とて、園女より御菓子井水仙を贈らる。支考、惟然介抱次郎兵衛とて、手届、以之道取計らひ、とて、舍羅吞舟と云ひの未、按摩あんまや、うけ、ぬ、今日三十余度、及ふ度、毎ふ裏急後重、次郎兵衛手記云、五日朝、支草、乙州、正秀、未、天氣曇る、寒冷甚し、時候の故、師時、惡寒の氣あり、次郎兵衛、天満、諸、登、き、帰、る、今日師食、み、は、索、麵、二、著、一、夜中、迄、不、五十、度、及、六、日、天、氣、陰、暗、き、ま、ま、一、日、朝、の、食、乳、面、三、著、前、後、より、す、ら、寝、入、ら、む、も、ち、ら、く、睡、眠、し、給、は、目、覚、り、去、来、と、ち、ら、く、召、し、て、先、の、頃、野、明、ら、方、残、し、置、し、大、井、川、の、白、捨、て、白、菊、の、句、と、残、し、置、ん、と、思、は、此、句、あり、り、景、色、過、い、き、と、夏、景、色、い、い、ら、ふ、ら、う、思、ひ、居、ら、し、清、滝、の、波、み、ち、り、ち、枯、れ、葉、と、作、し、事、柄、の、愛、り、た、れ、同、案、と、人、い、も、つ、と、大、井、川、の、白、捨、て、と、汝、の、申、し、ら、り、ち、頃、日、園、女、の、振、り、て、と、目、の、見、る、塵、も、と、吟、じ、え、是、と、同、案、に、似、て、句、の、道、と、同、し、夫、故、前、の、二、句、と、一、句、の、捨、て、白、菊、の、句、と、残、し、置、ん、と、思、は、

汝の意いん、去来淡とら、名匠のかく名と惜と道と重し、給、有、と、ま、ま、と、つ、う、句、一、章、ふ、ま、ま、と、千、辛、万、苦、し、う、御、病、惱、の、う、ら、の、御、骨、折、乱、雑、の、深、惜、と、尊、と、と、と、眼、あ、ら、の、何、者、ら、此、句、を、同、案、と、と、と、思、は、ら、い、此、句、を、同、案、同、意、と、と、と、申、も、の、無、眼、人、と、申、者、あ、り、その、故、に、此、句、々、景、情、不、備、と、て、句、意、と、見、る、持、ハ、三、句、と、の、不、別、と、我、の、句、の、意、と、目、に、見、て、句、の、次、女、と、見、ぞ、青、苔、日、厚、自、無、塵、是、隠、者、の、高、儀、と、ち、あ、ら、と、語、園、女、い、ま、と、わ、く、し、て、陌、上、桑、の、調、あ、ら、と、思、は、ら、い、と、意、と、妙、と、語、と、妙、と、ら、ん、世、人、此、句、と、と、と、の、れ、園、女、清、節、と、と、ら、ら、ん、と、波、の、塵、あ、ら、の、語、左、太、仲、が、必、非、絲、織、行、山、水、有、清、音、と、と、と、絶、唱、も、あ、ら、と、と、園、女、二、夫、ふ、ま、と、と、と、と、貞、潔、と、大、井、川、清、滝、の、絶、景、と、二、句、の、間、相、と、と、つ、て、感、じ、て、も、餘、り、と、申、せ、ら、し、師、の、機、嫌、と、と、し、け、り、去来手記云、七、日、朝、と、と、不、相、應、の、暖、氣、と、と、と、と、と、兩、方、逆、挽、湯、ふ、加、減、又、乳、麵、と、と、と、と、と、園、女、の、見、舞、と、と、と、菓子、亦、贈、と、と、と、と、と、去来、支考、會、秋、

冬は

終ふ薬とめさむ終日くゆる夜ふ入て暗る人音の  
 静よりうらむこと灯のりすふ人々加し居る人これ別正秀  
 亦去来不申したるは今度師より泉下の客とせしめ  
 給ひ此後の凡雅いうふ成行もたらふ去来黙して居る  
 一は我も其事心ふくりし故二日の消息もきしや名  
 斯いとまきまわりくる人々も左思ひもやとあはれ今  
 宵閑静に只今の体ふたふし御快復覚束ふし  
 滅後の俳諧とてい奉らんそとあづふ枕上ふうかひよ  
 こそ機嫌とせらひ問申したり、翁次郎兵衛みたま  
 けとされ自つともあはれ日俳諧の變化究ていふつ  
 まで真草行の三まともいふと其三より千変万化  
 也我のまご其喜とめりしこと、汝此以後とも地を  
 とあづふことあはれ地と心ハ社子美々老と思ひさひ西  
 上人の道と志とひ調ハ業平が高儀とらつし、どうまて  
 も我ま世ふあんとあはれいひあはれ他ふ化せらるる  
 まじひいともこれわれとも息中損口うまひとと喘ぎもひ  
 らまじハ吞舟脚口りともあはれ又兼とまわらせたまつ  
 まりあはれあはれ筆と扱て是と書きて惟然手記云

八日天氣快晴御不食より京の損士来り信徳より消息  
 とりて御病体と問、近江の角上より使来る人々勝手の  
 間とて今度の御所労平復と祈奉らんそ、住吉大明神  
 小連中より人と立へり、去来申しりまはむりくまらる  
 べし之道次郎兵衛闖はるる社務林采女方不祝詞  
 とらふ、厚く神納の品々贈らふ奉納、峠とも鴨のこ  
 ありや諸きむひ文章、木づらしの空見あはれ雀の声  
 去来起、うら声もあはれ湯波うら、支考、口うらふ  
 竹のまや、もしとらふ、惟然此外連中の大勢の集會ふ  
句あり奉之  
 今朝御脉をうらひ見申すも次第不氣力もあ  
 り、ふふふふふふ、脈体もあはれ、最初不食滞りもあ  
 泄泻もあはれ、根元脾胃いの虚とて大虚の痢疾あり、故ふ  
 逆挽湯主方あり、尚又加減して心を尽せしむこと、薬  
 力もあはれ、願くハ治法と他醫ふもあはれと思ふ去来師ふ  
 申師の曰木節の申条むもあはれ、仙方あり、  
 虎口竜鱗と醫ととも、天業つと、吾々悟道した  
 まは、我呼吸のうらまへ間ハ、どうまても木節が神方を服

冬は

せん他ふむとむい心ちのどのこまひをい支考し州亦去  
 来ふ何うとゆきまれば去来心得て病床の穢嫌とらひ  
 て申して云吉来より鴻名の宗匠なり大期小辞せあり  
 ささむりの名匠の辞せありしやと世ふりありあり  
 べしあはれ一句を残りしもの諸門人の望も思ぬへし師曰  
 昨日の発句ハタハの辞せありの発句ハ明日の辞せ吾生涯  
 のい捨し句々一句とて辞せありとていあへりか我辞世  
 いうわとふ人あへり此幸とてい捨せし句とていあへり  
 辞せありと申給はるる諸法從來常示寂滅相これ  
 ハ是釈尊の辞せありて一代の佛教此二句より外は  
 古池や蛙飛る水の水の音此句ハ我一凡を真とてい  
 めて辞せし其後百千の句と吐ふ此意ありとていあへり  
 らとて以て句々辞せありとていあへり申し次郎兵衛が側  
 より口と爛まふとていあへり息ありとていあへり  
 八日夜ハ入て嵯峨の野明為有より折を贈り来る消  
 息も今日まで伊賀より音信あり去来乙州申談し  
 らとて飛脚を立すより師ハ申されハ師の曰我隠遁  
 の身として虚弱ある身の數百里の飛杖わりの立親族

よりとていあへりとていあへりいあへり我過かり今大  
 病し申ゆかりあへり一類中のいあへり殊ハ主公の聞しめし  
 もおととありとていあへり此度大切ハ及ぶとていあへり沙汰有まると  
 宜ひかり師の慮ありとていあへり感心とていあへり度數六十度ハ  
 及ぶ唯然手記云九日諸子の取らひとていあへり衣袋  
 又夜具との坊つとていあへり不浄あるを脱がしよとていあへり衣袋  
 久まわらば師曰速地波濤のほとり草を敷塊と枕と  
 して終と取て身のかゝる美とていあへり禱の上とていあへり  
 去来よとの友とていあへりいあへりいあへり鬼録ハ上とていあへり  
 受生の本望あり昨夜目のあはれとていあへり不斗案し入る  
 吞舟ふりせとていあへりいあへり詠じとていあへり旅とていあへり夢と枯  
 野とていあへり枯野とていあへり夢とていあへり侍とていあへり  
 ありとていあへりいあへり辞せありとていあへり辞せありとていあへり  
 らとていあへり病中の吟ありとていあへりかゝる生死の大事を前ハ置  
 ありとていあへり生涯このいあへり一風流とていあへりいあへりいあへり  
 枕のいあへりいあへり去来ハ左ハあへり日々朝雲暮雨  
 の間も置き山水野鳥の声も捨たなむとていあへり心身夙雅とていあへり  
 さとていあへり河魚の患ふつとていあへりいあへりいあへりいあへり

冬は

其風神の七章とて多し、諸門葉の悦び他門の聞  
 え未代の龜鑑ありと涙そり涙とて眼あふもの  
 是と見ハ魂を飛さん耳あふものことと聞ハ毛髮これ  
 為ふことん列座の面々感慨悲想して慟絶し声なし  
 こと師翁一代の遺教経此日より殊更おほくあり  
 度敷まじきこと玉来手記云十日初時雨せり師夜の明  
 より度敷まじきこと一人あふ多し折節ふ語言あり  
 取あふること多し木蔭此日芍薬湯をり諸子も  
 より食事まじきことあふ多し梨実と  
 のことあふ木蔭く制しなをことあふ小望まじき  
 故止とてえむことあふ多し一片味ひてやまふ脾胃う  
 くる所あり死期ちかきあふとのふ申の下刺お至とて  
 人心地付多し今日ハ少も食しことあふふ惟然手記云  
 十一日朝まじき時雨を思ひけちく東武の其角来  
 身ハ東武のことも同伴を参宮の序和州紀伊と打  
 めり泉州より浪華ふ行へるもあふ多しあふ  
 聞つけとて爰と尋廻て漸くふうけつをり直ふ病  
 床ふ参て皮骨連立しあふひる体と見まわらせく且  
 愁ひ且悦ぶ師も見かりたるまでや唯涙とてあふ

其角とことあふさうらうさ居たりして大草去  
 来支考其外の衆次の間小招き却病体の始終と物語  
 る此夜もあふく加して思ひありことあふものこり  
 居たりふ亥の時頃ありして師夢の覺とも如く病  
 と望ことあふ人々うけりことあふ次郎兵衛とて  
 せうらひてとく炊きつけくまめまわらせ中うき枕  
 あて快く召さたり朔日以来の食事ハ土鍋小残  
 たるを去来梳ふ入ておしひき病中のあまあり  
 や冬こり去来去来云趣向と他ふむとめど何りあふ  
 事を口まらして師とあふあふあふせん深く案ふ入  
 らどと傾ふ句作りとあふ惟然ハ前夜正秀と二人で  
 一の蒲團と引たりと被ふふかちと引とあふ引て  
 ふもあふ寝入らざりれば果ハあふと夜明あふ  
 ぞ其事をさふいふ笑ひあふて引とくくやんふ寒き  
 わらひぬ惟然ハあふあふ夜伽もあふ冬籠正秀  
 一座是と聞てつぎもあふとあふはたれバ師もあふ  
 とあふり初時雨の空暗とて日影入りあふ蠅の

冬は

おぼく日句ふむらがり居るふ人々纏りて蠅ごう  
 うら上手下手あま見あひておぼらく奥ふ入あひけ  
 せど大病中のとふれハ忽ち倦まひて直小寝所ふ入  
 めハ支考ハ師の幾句と滅後ハ一集せん心願あれど此  
 ここの病苦ふあやもふ見合せ居りしふハ機嫌  
 よこふ乗じて申出侍らんと申しうらまは去来うて  
 師の心中を知りし故ハ大又怒りごうきこと申  
 りのハ師ハ平生名聞りき事このと給らざ今日漸  
 く快き体を見うけごうて諸人られと思ふ中ふ御  
 氣ふごうふことを聞せ申てごう御心と勞しめ申ごこと  
 奇怪ありこの後御床ちうくよりあふ早く其座を  
 立ちてし志あらくふ次の間ふ追立たり支考もごうら  
 りのい出して諸子の聞前面目ごうあひハ往々  
 惟然ふ打むくハ我ふ句ありご書ごうのいひてあ  
 るて次の間ごう寒くハ支考「さすハ支考ありこれハ  
 師もあのみごあひてごうがりのひくハ聞ごうて茶飯  
 たごまる夜伽ハ木節「ごあ子あり葦虫寒く鳴る  
 まご刑「ごうごまる蒸のりごの寒くハ支草「吹井より

雀ともあつてつごご其通一々惟然吟声「これハ師  
 支草が句を今二度と望ごあひて支草出まごごごうの  
 きごもさひごごうごのひごう面白しごごごご  
 声りてほめめひたり、ごふごうし師の機嫌のうら  
 きごを悦びらるハ木節一人愁をいごごる体ごごこれハ  
 其角その故と問ハ木節云病ハ除中の症ごごあ病  
 中絶食あハ俄ハ食のまごごあハ損症「死期遠き  
 ふわらごごのくハさあごごあごごあごご居ごご  
 夜半ごごより又寒熱往來ありて夜明ごごより顔色  
 土の如くごごあひごごハ悶亂「人もごごりごご  
 ごごりしが良ありて又實症ふよりあハ左右ハ舍羅吞  
 舟ごりより次郎兵衛抱きまぬらせて介抱し「ぼご  
 あハ夜明ごごハ十二日ありかひてハ閉ごごりごご  
 るごごの障子もふごご取ごごご去来其角支草  
 ごごごご招きごごハ穢ごごごごハ咫尺「ごご  
 ごごり行水ごごごごハ木節ごごごご制し申ごご  
 ごごごごの望ごごごご止ごごご湯ごごごごせり  
 座ごごごごのあハ木節り醫術と尽ごごごご

冬は

あどつらくお謝しむひさて三人の衆とちろく召れび  
 別正秀と左右より支考惟然ふ筆とてせおき跡のこと  
 こまかくと遺言しし病苦とてしもとてせおき跡の人々  
 奇異の思ひききありり伊賀の遺書ハ手づかり認め  
 らひ京江戸美濃尾張の遺言の如く遺言ししおき  
 門人筆記も次第ふ声たわたり痰喘虫損らひなまは次  
 郎兵衛湯まで口をうらわししまわらせたり良わたり  
 去来ふびひるひ先ころ實永阿闍梨より路通事  
 仰ありその後汝が文章乙州ホ贈りし消息露霜と  
 捨置と併いしころころありて雪井のよとふはし侍  
 りまが数年の薪水の労ゆめく置置と我まき跡  
 あゆめそふ見捨とめいも風交しめくふとたの侍諸  
 國おも傳へめいもいどい終てとまひて餘言は合掌  
 正しく観音経聞えてくそり息のかひも遠く  
 申の中刻まごて埋火の向くまうりこむか如く次郎兵衛  
 が抱きまわらせたりふよりころころ死顔うらりく眠  
 れるを期して物うちけたり時ふ元禄七甲戌年十月  
 十二日御歳五十一也即刻不浄とまきり白木の長櫃

収めまわらせその夜直ふ川舟まで伏見まで御供し奉る  
 其人々も其角去来文章乙州正秀末弟惟然支考之  
 道吞舟次郎兵衛以上十一人花屋仁右門が京一荷物と  
 送る体と長櫃の前後と取まき念仏誦経をかりて供  
 養し奉る八幡と過るころ夜もあつて明もあつてふ  
 僧本由の下りあつて舟おひきまきいびきとて乗つて  
 相とかわらせ物くりしてむややく京橋お着夫より  
 狼谷通りふかりつときふいそく程ふ十三日巳の時まきこ  
 大津乙州が宅お奉りり御沐浴ハ之道吞舟次郎兵衛  
 之御髪の伸させつて月代お文章法師まわらせり御  
 法衣淨衣ハ智月乙州が妻縫奉る淨衣白衣とて召  
 させまわらせつときお病いふふとてふやふひて茶色の衣  
 装とてまきこふとて茶色と召させまき智月尼のよう  
 らひして淨衣も茶色の服させられまき葬式ハ十四  
 あり終焉記云湖南の義仲寺に棺と移して近里遠  
 境の名を傳ふ人ハおふふとせまりて元三三日前  
 あつて墓ハ木曾殿ふとよりておのつら古ひの柳も  
 おれいこの終焉のちぢりあるとて野面の無縫

冬は





赤と帯其背腹斑の文あり初白ハ四ノ十月

鉢叩くの部空也忌 袴着かの部髪置 初鰯の条小注を

六月五六寸津波浪といふ夏のつこの部つこの条より

和漢三才圖會仲冬長して三四尺最大なるもの

五六尺鰯と名づつ、鮓とて冬春こまこと食ふ脂多く

味厚し丹後と上とこ此少きより老ふ至る時名を改む

初ハ江海ふあり徐大洋ふ出ると東北の海より連行

て西海對州小終る出世昇進の物とこれと太魚と稱

貴賤相饋つて 初深雪うらめて積 十二月獮

の枕説文 獮ハ熊小似て黄白色力多

温暖あり 故事要言節分小獮と云獸の形と画て枕

小敷し悪夢と見ると俗小をうと俗説小獮と

夢と食ふ 早咲の梅椿 梅椿の両種特小

ありとりの あり泉州堺の浦の人十月梅椿と京師小贈

ふ茶人特ふことと菴おぼひて茶寮の觀とて 晚歳

月会廣義 蜀の風俗晚歳 春の隣 隣歳の暮る

相鯢問こまこと鯢歳といふ 但し晦日小限らざるの古今俳諧哥 冬ふから

急ぐ春と待春近き 歳の暮の近き 春を

兼二冬物 鳩大和本草 鳩字彙 曰

て小ニ又本草不載と 鵲鳩 もつりつりあつて 鵲

順和名抄ニホと訓ス俗小鳥の字と用ふ 鳩 鵲

と一物二名次本草小鵲鳩大と鳩の如くつて 鵲

陸行とわつて常小水中小在て人至まがし 沈沈 貞貞 享

式鳩ハ鳴声も寒気とて俗語ふつたりともいふふと

俳諧俳諧 名目の自在と稱して冬ふ用わつて用ふ

ふりの鳩の巢ハ夏 煮凍 煮煮 凍凍

之夏の部之 煮凍 煮煮 凍凍

冬 煮凍 煮煮 凍凍

は 煮凍 煮煮 凍凍

に 煮凍 煮煮 凍凍

は 煮凍 煮煮 凍凍

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より  
来る気味蘿蔔小根より故に名づく

十月新

嘗祭

中々公事根源今年の初詣と神事奉ら  
せのあり御代の始りあり大嘗会や

八年毎のとき新嘗会といふト食の入々  
指衣日陰と著き用昭天皇一年四月より始む

庭燎の

部神楽のみき部鷹の葉  
錦の帽子

新玉津

島火焼

十三日倭成卿御著し五条の南鳥丸の西玉  
津島町よりあり紀事昨今冷泉家

多く参詣を或ハ法衆の和音あり九この門前一町と  
と云く此社の氏子あり今日市人神前の御酒を

冷泉家不献る時  
酒食と賜をふる

鶏乳

部の鵲始集と

活

十月法勝寺大乘會

廿日より○當寺ハ  
廿八日まで 白河法皇

の皇居よりその後天台宗の住持聖道衣より後  
醍醐帝の勅より律衣とある今寺絶て岡崎

村の敷中諸堂の跡残る九重の塔の跡村の南ふり  
と塔壇と号す糸櫻の名所あり風雅集淨妙寺関白

立よりて過ぬる心あり心あり春の木の糸  
一説に當寺ハ南禅寺の西北新黒谷の南あり云の地

ハ白川の大正忠仁公の別業ありて寺ハ白川院の御願  
たり當寺の九重の塔浪速の浦ありつうとあり

蕪三冬物

と掘出しるものあり關東まで

根骨といふ山家玄冬のころゆふ昼夜をまこと焼く  
寒と凌ぐものあり糸切菌不滑ハ昼夜をくものあり

夜明るは寒を防ぐ用とん  
採て簷下おけ陰不

干菜鉤

蕪菁の葉を

乾き喚て懸菜と長

十月報恩講

御仙事  
御講

廿二日より廿八日まで○親鸞上人の忌日あり上人ハ  
内丸の後胤藤原の右範の男伯父範綱養ひて子

と師とも後源空の子とも弘長二年十月廿八日

冬 ぼへと

寂と年九十一浄土真宗の開祖より、東西本願寺十月廿二日より廿八日まで報恩講と修ま、京江戸在家宗門の徒悉皆群集も或ハ御霜月と称せ、又御講との入、昨今時として天気快晴も俗よる事と御講風といふ、

**十二月星佛賣**

十一日 紀事 此月十三日大佛師 未年の属星の形を彫く

禁裡不献む、民間にも亦この事と云ふ故に人家各星佛を買て帰依の僧と請きてことと祭る、故に市中星

と賣者あり、所謂日曜、月曜、水曜、水曜、火曜、曜、計都の像あり、



冬瓜 時珍曰冬瓜其冬熟を以てあり、貞享

或ハ瓜と云ふと訓あり、中古ハ総て秋季とせり、

西瓜と秋とせり、加減より、東福寺開山忌

忌と志の部不注と、兼三冬物鳥叫、鳥立と暮

たの部鷹、海鼠、十一月冬至

朔旦冬至、月令廣義、大雪の後十五日、斗子不指と

一陽の嘉節、冬至と十一月の中、陰極て陽始て至る、

日南不至、漸く長く至る、玉燭宝典、十二月子不建

す、周の正月、冬至日南不極、景極て長し、陰陽日月

万物の始、律黄鐘不當、其管最も長し、故に履長の

賀あり、朔旦冬至、李吟云、十一月朔日冬至、不あくといふ

あり、世年一度まゝとあてめて、瑞祥あり、とて、

其日ハ天子南殿より出御ありて、旬と行をせ、多し、公卿

賀表と奉るとあり、一陽の嘉節、李吟云、十月ハ無

**御覽**

この部五節、豊明節會

江次第、新嘗會裏書云、毎年十一月中の辰の日、行之

豊の明の節會是、天子新穀と嘗む、故に新嘗會

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

冬と

とつ云 **公事根源** 今年の箱と神ふ奉らせむいて  
 今日君ゆきこし、臣ゆもたまふ故ふ節会行ひ  
 新嘗の祭りて、上卿宰相、辨小忌衣と著る、余人  
 諸司の小忌と束帯のうふ者とも、さふらひく青  
 摺と用ふ、上卿宰相辨の上首と勤ひ南殿の箱ふ元  
 子とまうけ、内辨已下座あつく、白き酒黒き酒の不皿と  
 とり、大奇の別當りより、舞姫のら、五度袖とり  
 入、事ふ燃る、上達部五節所とあひて  
 催馬衆とさう、入節会の儀常のことし、下界○小忌衣  
 斎服小忌の青摺小忌の袖、山藍の袖、或記云小忌の文竹  
 桐夏、室くと冬ハ室くと、舞人と奉る時、拜領すとて  
 少年少の人ハ私ふとと調へ着用をら、入大嘗会豊  
 の明の節会、用ふ、件の節会ふ小忌の袍と着用と、其時  
 関袂の如し、但身一幅、袴衣の寸法と用ふ、又白き袍と  
 粉張りて藍とさう、後ふ室くと、裏あり、只一重、又小草  
 柳、水草、蕨、蝶小鳥ホ、山藍の葉ふ、摺又諸司小忌と  
 つ、わり、建曆の度麻布鹿悪のの、**和訓栞** 小忌はと  
 畧も大忌ふ對も、此大小ハ鹿細との、○日蔭蔓、日蔭  
 の糸 **和訓栞** 延喜式、日蔭の蔓とさう、古事記  
 天の日影との、神代卷よ、以薙為手綱とら、松羅  
 一名女羅是、ととも別種あ、今狐のとうせむ  
 物具、新拾遺、玉ひうけともよめ、入大嘗会、用ひ  
 させら、式あり、く出、今白糸音糸と  
 組、冠の左右ハ垂させら、其表物との、より、日  
 うけの組ひうけの糸とも、とて、磐戸ハ神のこも  
 らせ、ひ、時あ、日影、出入、言書てなを  
 きふら、と、ふら、と、**和訓栞** 大嘗会  
 小冠の上ハ懸る、祭主とハ賢木の枝とせ、  
 神代の卷ふその上、と、桃花、葉葉ふ、心葉ハ金  
 銅の梅花こと、と、萬葉集、大嘗会、の、と、と、  
 と、今主上ハ櫻の挿頭とて、造、大臣ハ藤、大  
 中納言ハ山吹、叢議ハ梅、と、減金と用、**東三**

**條の御神樂** かの部神樂  
 採物歌 かの部神  
 樂哥の糸  
 十六日、持、天王寺領、天王寺村、小  
 出、道祖神祭、あり、祭、所、藤田彦命あり

冬、と

この日一村の童のつらみ、往來の人ふ錢とむひて祭礼の料とせ、錢とあつて、戦れぬ繩と以て往來と遮り留むよりして、つらみとせざるもの、商買とつても今日此處と通り、但坂の魚荷飛脚ハ、故ありて道路まづらひ、酉の市、伊豆國賀茂郡、鶏のふんどせ、三島の駅あり、

**町詰** 酉の日、鶏大明神の社ハ武州葛飾郡花又村、酒の日、三つあれば三日ともふ市あり、上の酉の日と専ら、江戸近在より諸人群集して甚ど賑り、是當社神事の遺意、土産ふ芋くらと賣、恭詣の人必これと買ひて家ふ帰る、又此日浅草寺の裏手鶏大明神も此市、

**冬至至梅** 和漢三才圖會、單葉の冬あつて群集、至梅中花ありて紅、冬月ひらく八重ありて

**十二月 立土牛童子像** 花浅紅の者あり、

**公事根源** 大寒の日夜半、陰陽師土牛童子の像と門口より、青黄赤白黒の土牛と、門々小春夏秋

冬の色小随ひて、つらみ、慶雲二年天下疫癘、さうりあつて百姓み多く失りしうむ、土牛を作つて追儼と

つらみとせ、まうりき、異國の書あり、農事のくらふ時と示さんとして、土牛と立ちり、**延喜式** 土偶人

十二枚、高サ各、**豆腐蒟蒻と氷**、製法本

土牛十二頭、**朝食鑑**、

とせ、**年忘**、歳の暮、親戚朋友と會り、宴と設く、つらみと年忘とせ、是年中の勞を忘る

意、**羊木推**、春用つる所の薪と年内、**樵置**、是

と、**命四監**、**秩薪柴**、又云孟春之月禁止伐木、

注、以盛徳在木也、云然、まハ春ハ木と伐らぬ、

年の内、春の薪と伐ること、**樵**、あること、**夫木**

高島の松山川の筏士ハ、つらみ、年木と積や、つらみ

**年の市**、来春用する物と悉く賣るあり、**五元集**

年の市、つらみ、つらみ、つらみ、つらみ、つらみ、つらみ、

**年の終の魂祭**、秋のこの部魂、**年内立春**、祭の条ふ出、

冬

古今年のうち春ハ来みたり一とせま去生とやいん

部を代々の撰集ゆりハ巻頭ハ入らふ連哥ハ冬ニ俳諧又冬ハ用

の暮芭蕉 年の終 古今あはれみのこのころ

在原元方 年浪あがき 新勅とらむやあがきて

水まろくくも 歳の末 続古とらくおひの年の

領子内親王 年の湊 春の湊み準 年の際、年

の名残、年の夕、年の果、年みり 各字

如、年籠 滑稽雜談 和俗大晦日の夜 冥仏冥社

ハ憐あふくころるあり 猿蓑 十月

茶の花 陸羽茶経 其樹瓜盧の如く葉ハ苞子の

力草 たの部鷹狩 千鳥 村千鳥 浦千鳥 磯

鳥島千鳥濱 和漢三才圖會 鶴 千鳥俗 萬葉

千鳥 小夜千鳥 集乳鳥ととも又智鳥 江海水邊ハ

不似て大ニ其頭蒼黒頬白く眼の後ハ黒き條あり

水上ハ飛鳴き侶とよハ九鶴の種類 千鳥足 和

本草雀より大ニ前三指後指あり 赤ハ不足と左右

冬 ちりぬる





岐ふく屈曲して宇賀神のとこ尾越の鴨うも 貞亨式 此名を

俗言鴨、往來の道と定めて山の尾寄より越る故

と、然れを初鴨と秋とほし鴨とむりりと冬とあせる

名、殊小俳諧 **兼三冬物** 山の小野炭 山城国小野

の用と云べし、 大和本草 山東通志云掖縣より出の色

青白と兼ぬ潤膩玉の如し味甘く毒ふ

し薬物小備ふべし、日本は温石といふ物あり、色白じて

少く青し、ややくあり、是山東通志ふまらざる温石と同

物あり、 **落葉** この部木の葉 **追鳥狩** を

し草、落草、呼声 各たの部鷹 **鴛鴦** 狩の条注を

**鴛鴦** とりの劔羽 和漢三才圖會 其羽毛五彩なり、頭

とりの思羽 小玄纒あり、頸小紅糸あり、背小

き羽あり、摺扇の半邊のとし、俗小劔羽と称せ、九月

多く至る家々庭池小養ふ、然も鳧鴨と同居と、鴨

ハ蒼色ありて目の後小白き條あり、翅尾黒く腹黄ふ

赤黒の紋あり、 **大和本草** 嶋雄相小愛して相離さ、他

鳥小異あり、東垣曰二其一と失へ、朝夕思ひ慕ひ憔悴

して死を皆憐夫、うと以て其雄の首と射切る、其翌

年又其水辺を通る時、雌一隻ありと射殺して、其翅

の内小去年射りし雄の首とごり、 **新撰六帖** 池

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

尾越の鴨

兼三冬物

小野炭

温石

落葉

追鳥狩

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦

鴛鴦



その後舞曲も、金春金剛の兩座大夫供奉の時、船の立合と舞ふ、觀世保生兩座の大夫供奉の時、弓矢の立合と舞ふ、大小の鼓と以て、拍と殿後、大和國と領、武家、各鞍置馬、長柄の鎗を出し、奉供の行列あり、夜ふ入して、旅所より還幸、粗神幸の義、同日、○日の使、關白殿下より奉らる、騎馬、伶人、是より黒袍冠の中子、小藤の造、花と、この祭、八人皇七十五代、崇徳院御宇、天下大饑饉、三年又大疫癘あり、關白法性寺忠通公、この祭礼の大願と發し、ば、天下静ふより、毎年行々と、保延二年丙辰九月二十七日、この祭の、○掛鳥、春日祭のとき、鳥獸と以て、懸、と、掛鳥、雉千二百五十六羽、鬼一百二十四、狸百四十二匹、是又保延二年、春日小先規より、地付と六派あり、平田、長川、長谷川、葛上、乾服、數、奈良の六宿所あり、掛鳥の事と主、○後日の能、春日祭の翌廿八日、能藝と施、ま、前日旅所の前、流鑄馬、伶人の舞相撲細

男舞田樂ありて又翌廿八日

十二月 弟兒の朔日

猿樂あり、故、後日の能と、

乙兒の餅

一年中の朔日の終まり、俗、乙子の朔日、和の諺、子の子とし子と稱

も、又初の子と太郎子と稱、故、歳の初の月と太郎月、つゝ、歳の末の月とし子の月、故、乙子の朔日、又此日餅と、子の子の餅と、江戸の俗、川浸餅、俗傳、食ハ水難、

大神祭

此祭一年、兩度あり、御佛名、夏、この部、注、

被綿

十九日、續日本後紀、仁明天皇五年、始

柏梨の勸盃、廿一日、送、て宮中、小仏名と置く、公事振源

仁寿殿の御本尊と、うつして、御帳の中、ふけて、南の額の間、又南北、小机と、佛像塔形と、佛前、小

香華と備、廂、地獄変相の御屏風、○被綿、御仏名の時、導師並、衆僧、被け賜、綿、

江次第、○柏梨の勸盃、江次第、裏書、云

柏梨の勸盃、む、府の中將、和氣の某、攝津國、柏

冬、を



ハ分明あらざる或ハ真綿まきわたも木綿きわたもをてて冬ありと  
 綿わた入ハ綿わた枝の對たいふもハ入字と添そてハ冬と定むる也  
 綿わた打と秋と定むる也綿わたとハ摘とりハ綿わたとハ打うちとハ打  
 ハ木綿きわたやて次つぎハ冬と定むる也綿わた帽子ぼうし  
 新綿しんわた棉わた取の外ハ秋あきやあむ也綿わた帽子ぼうし  
 被かて用て其面おもてと蔽おほふも及およばざる輩とも夏ハ羅らの帽ぼうし  
 子こと用ひ冬ハ綿わたの帽子ぼうしと用ひ唯青樓あざな伎婦きぶの輩ともの  
 ことと用ひ故ハ京師きやうしの人綿わた衣い  
 面おもてと蔽おほふものといやと綿わた衣い  
 と製つく所々小絹こきぬとくつく老らう者もの  
 者寒さむと寒さむぐの服ふくも長短ちやうたん心こころに従したがふ  
 薄うすくこれと切きつ状車じやうぐるまの輪りん  
 此これとこれと輪炭りんたんとハ  
 の人十二月小の月つきのハ翌あした朔しやく日にち  
 と以て晦日かいにちとも故ハ私し大だいと  
**如**十月神じゆつしん  
 送おく神かみの留守るす神かみの旅たび神かみ迎むか  
 出雲國大社いづもくにひたしだいしや不ふ集じふことともハ男女なんにやの縁ゆかりと結むすぶこと  
 つくあり神送かみおく神かみの留守るす神かみ迎むかホの事あり猿蓑さるま神かみ  
 迎水むかひみづ口くちとくつ  
 馬うまの鈴すず珍碩ちんせき  
 音ねの時雨ときあめ川音かゝねとこれハ  
 寒さむ菊きく寒さむ梅うめ寒さむ菊きく天和本草あまのほんそう寒さむ菊きく  
 寒さむ菊きく寒さむ梅うめ寒さむ菊きく天和本草あまのほんそう寒さむ菊きく  
 瓜うり冬瓜ふゆうりの枯尾花かびな貞享式ていかうしき此名ハ古今ここんふ  
 部ぶと瓜うり枯尾花かびな論ろんありて秋あきともハ冬ふゆ  
 ともいへども枯かの字じと  
 結むすびてハ冬と定むる也  
 雪ゆきなはら雪ゆき養文やうぶん云夏衣なつぎふくけく薄うすき雪ゆきは  
 子集こじふ佐保路さほろのうら雪ゆきやまら雪ゆきは九重く九重と  
 うら雪ゆきの一重いちじゆうの山やま姫ひめはうら雪ゆきとら雪ゆきは  
 冬ふゆか

綿わた衣い 衣いの如ごとくこれ  
 其炭そのすすの  
 大だい少せうもの  
 奥州おくしゅう  
 南部なんぶ  
 此月このつき  
 諸神しよしん  
 事ことの条じょうハ出でッ  
 川かゝ  
 天和本草あまのほんそう  
 寒さむ菊きく  
 寒さむ梅うめ  
 貞享式ていかうしき  
 此名ハ古今ここんふ  
 論ろんありて秋あきともハ冬ふゆ  
 兼あま三さん天てん物ぶつかびら  
 天てん  
 九重く九重  
 山やま姫ひめ  
 冬ふゆか

玉海集のつら帷子雪花衣こハ男文字書き書

片葩ハシ證ハシとる不足ハシ非諸歲時記ハシとびらと

雪鹿文云ハシ雪と略ハシ一説ハシ藝

藝の兼ハシ似ハシ故の名ハシ青藍云ハシ穠葉集ハシ附

鶯の音ハシ雪降ハシ此句語勢と按ハシ廉文の

如くハシ雪の略ハシ北越雪譜ハシ

薄雪ハシ櫛ハシクハキハ

古訓ハシ里俗ハシ一尺二三寸横ハシ七寸五六分

云ハシシヤカラハシとり木の枝ハシ作ハシ鼻ハシ反ハシしてハシ之ハシ

といハシ蔓ハシ又ハシハカツラハシといハシ蔓ハシとも用ハシ山添ハシの肉付ハシの

皮ハシをハシ巻ハシこハシむハシ是ハシハ前ハシ小ハシ品ハシしハシ香ハシの下ハシをハシく

ものありハシ雪ハシふハシこハシまハシりハシハハシ堅ハシ二尺

五六寸ハシよりハシ三尺餘ハシ横ハシ一尺二三寸ハシ山竹ハシとハシあハシりハシてハシ作ハシるハシ

かハシきハシまハシづハシりのハシニハシハハシ冬ハシ雪ハシのハシやハシりハシるハシ時ハシ踏ハシこハシるハシ

為ハシ小用ハシふハシきハシつハシけハシぬハシ人ハシハハシ足ハシもハシあハシりハシまハシれハシるハシ

者ハシハハシこれハシとハシきハシ鐘ハシ水ハシ寒夜小鐘のハシ声ハシのハシこハシえハシるハシ

てハシ獸ハシとハシ追ハシふハシ鐘ハシとハシりハシあハシりハシまハシれハシるハシ

鐘ハシ

さゆり

麻相夜ハシふハシ小鐘ハシのハシ立ハシ音ハシのハシ一ハシ入ハシさハシえハシてハシきハシまハシづハシりハシるハシ紙衣紙

衣賣

雍州府志ハシ紙子ハシ倭俗ハシ白くハシ厚きハシ紙ハシつ

とる宵露宿ハシはハシまハシるハシときハシ色ハシとハシ登ハシまハシるハシ両手ハシ小ハシ揉ハシこハシ

和らげ衣服ハシはハシ製ハシまハシるハシ是ハシとハシ紙子ハシとハシ称ハシもハシ寒気ハシとハシ禦

がハシまハシひハシ中古洛東清水坂の人ハシ是ハシとハシ裕ハシはハシ製ハシまハシるハシこと

清水紙子ハシといハシひハシ又ハシ素紙子ハシといハシひハシ又ハシ紀州根采ハシの土人

白紙ハシとハシ以ハシてハシ柿渋ハシをハシ塗ハシらハシるハシてハシこハシまハシとハシ製ハシまハシるハシ白紙子

といハシふハシ是ハシ女子ハシの手ハシとハシ經ハシをハシしハシてハシ成ハシるハシ故ハシふハシ持律ハシ及ハシび

南都東大寺二月堂修法の僧徒ハシとハシ者ハシもハシ好事ハシの

者ハシまハシとハシこれハシとハシ着ハシるハシ○紙子賣ハシ夕紅ハシ元禄十ハシ仙臺ハシの

浄瑠璃ハシきハシんハシ紙子賣ハシ此ハシ外ハシ紙子賣ハシのハシ句ハシ多ハシしハシ滑替ハシ

雑談野郎遊ハシかハシもハシ着ハシまハシとハシ云ハシ元禄年中ハシ小ハシ流行ハシせ

紙衾ハシのハシ部ハシ衾ハシ九七月ハシのハシしハシめ

種ハシもの根葉ハシとハシわハシりハシらハシれハシ林ハシのハシ属ハシひハシ其ハシ根長

くハシしてハシ白ハシしハシ莖粗ハシくハシ葉太ハシくハシしてハシ厚ハシくハシ潤ハシしハシ夏の

冬ハシか



肉一塊あり大房馬の蹄の如し小あまの人の指の  
面の如し潮の来る毎に諸房皆開く小虫入るま  
はんと合し腹小充しひ〇時珍曰牡蛎蛤蚌の属  
皆胎生卵生あり独化生純雄ありて鳴あり故小牡  
の名を得たり蛎とひ蟾とらふ其粗大とらふ

十月

〇石花の字ハ文選江賦より見えあり

春日祭

十四日此祭一年に兩度 狩の使 節の条ニ  
あり春の部注ス

賀茂時祭

出 賀茂根源宇多天皇のま  
王侍従と申奉るるとき

狩しとまひるる賀茂大明神出現さあひて臨時の  
祭となふべきより約しつゝこのありて寛平元年十

神樂

庭火 公事根元天と神  
と奉らせむゆへ

神の天の岩戸とてこもりとあひし時諸神ののり  
申さるるふ天鈿女命真辟葛と葛とて日蔭と

手鑑みとらふ舞庭火とてこしゆりよりとらふる  
事我朝の風俗神代よりあるべきや〇阿知女 梁塵

抄阿知女作法 阿知女於於於 阿知女於於於 〇一  
禪閣脚説あちの作法造成所見あり但鈿女とあち

とつちあわとうと相通るく天鈿命の岩戸の前  
俳優とたり侍ると今の世はあちの作法とつちあ

おおおハ笑をい声あり日本紀ありアと笑声とあり  
コ、オ、又五音通るあり〇東三條の御神樂 兵範

記云仁平二年十月十七日丁未東三條の御神樂行ハ  
る云云 拾芥抄 東三條の第八四條院誕生の所或々重

神樂歌

千歳早哥 吉々利々 星得錢  
子 木綿作 晝目 弓立 朝倉

神遊ハ哥

珠物哥 大前張

小前張 或説ハ大嘗会の時近江の坂田郡より老翁  
の叅つて稻と巻くとの時あつらへき年の

とめふりしことを千とせとてたのきとつめふりふ  
哥とてふふり此哥古今集ありえとありあつらへき年

の始ハ御即位の始に始りしことを如此とてしたのきと  
つらとハ樂とつらとてあつらへき〇舞の哥とてあつら

冬 加



き山ふらる雪のまゆ時ふくおのりぬまか  
葛城山例の枕詞あり○採物哥、神幣杖、藤弓、  
劔抄、片折、諸舉、葛以上手採物ゆゑ採物哥と  
り○大前張、宮人、木綿志天、難波瀉、前張、階香  
取、井奈野、股母古○小前張、蓆枕、閑野、磯等、條波  
殖規、總角、大宮、湊田、養、以上神樂哥ゆゑと本未  
あり、皆冬季

韓神謡

梁塵抄 宮内省ふまゝ  
韓神二座と申すや、○本

とわりあり、  
みしよへかふふらうけつらうらかむらとさせんや  
からとき、未ハらそと手ふらうらむらとせらかもの  
らとさせん  
や、うらとせ

髮置、幞初

袴着 紀事 此月吉日  
帯解 と撰ま九院中三

才の諸王子御髪上御色直し、五才の宮方御深置義  
着袴、九歳の御方御紐直し等、所謂地下の髮置務  
着帯解是○幞初ハ五歳或ハ七歳の女子ハ初めて  
幞衣と蒙らむむとあり、滑枕曾雜談 九綿帽子の  
尺あると見ふうらうら、是と白髮綿と称す、其寿の  
らんこと祝するものこと綿の置る半と金箔

と以て彩るる太き元結みて結ぶること童頭髻と云  
又菰柑子といふ赤き実と云ふ髻ふ結付るもあり、未  
廣扇と見ふ持し、吉日と云ふ、  
産沙神の社へ詣づるあり云  
掛鳥 の条ふ出又

歌舞妓足揃、顔見

連見 假婦伎の名ハ  
文献通考

今、俗哥舞妓小作、十一月朔日、京江戸  
大坂芝居顔見、この顔見といふは三代目中村勘  
三郎工夫と以てことごとくむらうら、又大坂や、夜芝  
居と云ふこと、空氷のころ、嵐三右門といふ、歳子、小夜  
嵐といふ狂言、甚と藝昌して見物夜中より群集し  
後ハ初夜より来り、るゆゑ、これを嘉例と云ふ、顔  
見ハ夜芝居真行も、あん、凡俳優一年の座組、この在  
言不定む、故ハ顔見、面見の称わり、又晦日の夜茶店の  
軒ハ種々の造り物と出さ、これと顔見の飾物といふ、或  
ハ貝負の花、至り、酒樽、醬油、或ハ炭の類、何れも、  
山の如く、積あげ、大札と出し、進上、某文の文字と書  
ると積物といふ、まらと見物せんこと、諸人群集する

冬、か

こと更ふりふべしを九能優家十一月朔日と以て相祝と云元日のごとく芝居の正月と云 **杜夫魚**

山海名産圖全越前の霞魚ハ此国の外ふありて杜父魚ハ充る誤ること霞のふる時ハ腹と上りて流るること一名と云ふことハ入るあり是杜父魚の種類あり杜父といひて誤りあり

類あり杜父といひて誤りあり **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我 **寒苦鳥** 五雜俎 五臺山小虫ありて四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴と鳳凰我

杜夫魚

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

寒苦鳥

五雜俎

五臺山小虫

鳳凰我

十二月被綿栢

梨勸盃 どの部御仏 名の条注ス 鶺鴒始巢 鶺鴒始巢 鶺鴒始巢

此記五月之假五月十二月也雞乳同上大寒之候十二月中也○一説云十二月始めて巢く

ふ戸開ふ太歳よ背き太乙小向ふ未歳凡多きこと

あり〜巢ふあり〜車下も故よ日鶺鴒未と知り猩々

往と知る○鶺鴒の形状 乾鮓 乾鮓も空也のやせ

秋の部鶺鴒の條注ス 乾鮓 乾鮓も空也のやせ

も寒の 加小拂 滑菴日雜談 僧尼山伏の輩よ金銀米錢を

と供養し施行するを俗よ加小拂といふ具ふハ如年

拂ふるべし今年無支不送つと来年と待えく又年

と加ふべき祈禱ふ其身 竈公祀 五雜俎 俗皆十

の凶年と云らふ事あり 竈公祀 二月二十四日竈

祀る謂り竈神この夜天ふ上りて一家の善惡を以て

天よ奏せ是日婦人女子弁と持ス云俗猶これと竈

公といふ萬畢術よ云竈神晦日天よ帰る人の罪過を

白ま 酉陽雜俎 竈神六女あり常は月の晦と以て天

冬 加



人一人これに従ふとの式正月十九日の夜の行法は同じ節分の朝ト部家宗源殿小於て神道護摩と修ま疫神齋札三千枚と出諸人求めて門戸貼あり



十月 煖爐

會 月の部必開 達磨忌 廿日 紀事 深の大道二 手十月五日入寂大

小の禪刹悉くこれと修ま 元亨秋書達磨者南印度 香至王第三の子之蕭梁普光元年庚子支那ふまり 武帝のころ小茅一義と説帝契つて乃江と渡り 魏ふ入高山の少林寺小居九白九と経て天竺小帰 兼

三冬物玉の塵 玉の屑同じ たいり雪 惟子

雪の条よ 垂氷 つの部つら 炭團 注不 湯婆 併せ注ま 及

和漢三才圖會大年保唐音欵按湯婆銅と以てこま と作る大之杖の如くして小き口あり湯と盛罍の傍 不置て腰脚と煖む因て婆の名と得り竹夫人と此 と寒暑懸隔の重器とすの黄山谷湯婆詩云小瓶

暖足 足袋 華とひ 和漢三才圖會單皮足袋 俗踏 鹿の皮と以て半靴とも名つけく多鼻とつて單皮の 二字と用ふト 凡冬ハ皮と用ひ夏ハ棉とりちふ

大根引 集解六月種と下し秋苗ととり冬 烟春 の末莖と抽んで小花とひらく紫碧花夏 の初角と結ふ 貞享式大根引此詞ハ冬の當用あり大 根と畧して音語よびし京家のハ引引ふ效ふハハ

刀息 鷹 時珍曰鷹鳥鷹撃と以て 故ふるれを鷹とつて其頂ふ 毛角あり故よ角鷹とつて其性猛爽故よ鷄鳩とつて 天和本草鷹鳥の類三種あり 鷂の類鷹の類 鷂鳥の 類 和漢三才圖會鷹の尾十二枚長五六寸ふく 合て未ハ四く黑白の重紋あり天寒とあつときハ尾と 疊むと一枚のどくも尾損傷と遇とまハ漆樹の汁と 取て他の鷹の尾と接尾の下ハ三品の毛あり尾末毛 とつハ乱糸狭衣下の尾と石打とつて尾の端の白者 と杓華とつて背の毛と母衣毛とつて其股と出る白

又、 に



格ハ野山少シ結ムル一切立木の枝のあふふ外類

ハゆらぬもの枝を羽さくくものこ又架布ハ架布と

とのハ垂布ハ似たり、**鷹鳥鞆** 和名抄鞆 和名太加 骨

家の紋ふと染る、**鷹鳥鞆** 衣也鷹鳥三百首抄ハ方

家ふかけと **鷹鳥鞆** 同上鷹鳥あつりハ鞆より長き

手きもの、**鷹鳥鞆** 夜のあつ居の時鷹鳥あつり

て寐ませぬ道具之當時 **鷹の薬** 柳の露切薬の

ハ鞆とこのよう使う、**鷹の薬** 水夜取水 恩

沢水 條吹 **鷹鳥經驗方** 柳の木の上小虫あり、状ち

錦の帽子 鳥の卵の如くして斑文あり、其虫と取て

水子持て食は和しこれと飼ふハ神切あつり、○切

壺の水、柳の露 一条基房卿鷹飼連哥抄切づらの水と

ハ鷹の薬あり、桑の葉の切口ふとあり、こゝろ水あり、柳

の露、これハ桑の水と、○一説ハ夜取水 恩 沢水、意

慕水と、ハ皆女の經水のとあり、○條吹 **鷹三百首**

抄 條吹と、青竹とあつめて切口よりづる意氣あつり、

鷹の羽のめつとると直まるとハ、○錦の帽子 同上

錦の帽子とハ、いふも色よき紅葉と取てと、鷹鳥の

虱と洗ふ、**鷹鳥の經緒** 鷹書 紅緒と、ハ

と、いふ、**鷹鳥の經緒** 付つと、ハ、經緒ハ、鶴

より、小き鷹鳥あり、大鷹鳥あり、をき繩と、

四十尋の繩あり、九經緒ハ二十ひらあり、**鷹鳥の**

**餌袋** 鷹三百首抄 水餌とハ、洗ひ餌のとあり、ハ、主餌

を、くり付て、**鷹鳥大** 打餌 犬ハ三品あり、田犬とのハ

飼ふとのハ、**鷹鳥大** 吠犬といひ、食犬といふ、

田犬則鷹鳥大、○打餌 **鷹鳥三百首抄** 打餌とハ、犬の食

物あり、犬ハ野山あつて飯は糠とまかせて餌の如くして、

鳥と立る、**竹瓮** 深くせと、深き江の底に沈め

時、飼あり、**竹瓮** 魚と取具あり、その形丸き

小籠あつて口ふらくりあり、沈むとき、口開き、引上る

時、口閉、是ハ餌と入て、湖底に沈め、おきて、雜魚蝦と

取尤冬月多、湖西堅田の漁船一艘ハ竹瓮數百ア

積沖、漕運出て、こゝと沈む、漁人の産、芋環ハ、釜

字と用ハ、非ハ、釜ハ、ハ、といふ、の、て、流川ハ、

よきて、魚と取る具あり、つと、ハ、大違ふ、**短日**

冬、

月令廣義漏刻益四十一刻夜 **杏魚** 東医室鑑杏魚俗名大口魚

五十九刻 **杜詩** 寒日經蒼短 **杏魚** 西州の北海の生せし朝鮮の甚多し寒國の生せし

大和本草 **大口魚** 北土の海ふ多く南海ふ生せし 冬春多く捕る **和漢三才圖會** 夏月全くふし故

俗鱈字を伴ふ味鮮魚佳らむ臚とて甚佳し こころ塩鱈といふ其鯛煮て食ふべし或ハ酢に浸し

食ふもまこと佳なり ○雲鯛 杏魚の鯛之雲鯛菊鯛之 むら形色と **雞印酒** 寒気と禦ぐんふ **十月** 以て名づく 飲之依て季とす

**當麻祭** 十四日一年一雨度あり夏 **鎮靈祭** のたの部とす

中寅 ○吉田八幡の祭 公事根源 この祭ハ人の魂 魄の離遊を招きて身中小鎮子の寄持あり

宇摩志麻命よ **大師講** 智者大師の 起りごと **大師講** 智者大師の 忘日廿一日

より廿四日ふ至る諸山大師講と修む 比叡東叡日光 の三山廿一日より廿三日ふ至るまで 昼夜法問あり

と論議しつゝ一山一院づゝ会場と勤むらんと天台会 といふ俗もまこと大師講と修し各赤小豆粥とく

枯柴と折て箸として是と智慧の粥といふ 仏祖運載 天台智者禪師開皇十七年十一月廿四日ふ寂大師

諱ハ智顛字ハ **澤庵漬製** 九十一月中旬よ 德安瀬川の人畧 大根の澤庵

漬と製を ○青藍云沢庵和尚より多てこれと製 を故小名くといつゝ愚按さるゝ沢庵和尚の墓所

武江品川東海寺ふあり魚籠塔とて丸き石と置の 大根漬の壓ふ丸き石と置るとみな沢庵和

尚の墓所の形とよく似 **十二月大徳寺** 故小俗沢庵漬といふ

**開山忌** 廿二日大徳寺ハ山城國葛野郡紫野ふ あり今日開山大燈國師の忌日

**和漢禪刹次第** 大燈國師行狀云師諱ハ妙超宗峯ハ 其号あり播州揖西縣ふ生む紀氏の子父母觀音大

士は禱て誕生を十一歳の時同國書寫山戒信律師 と師とて成長して不立文字の宗風とす 中 畧建 冬 たり

武二年十月 宝船敷 紀事 節分の夜画船と  
廿二日逝去 白紙貼け諸臣賜入

地下良賤も画船と袂の底に布て寝る今夜吉夢  
あるとき来歳福と得らん悪夢を見るときは翌朝

こんと流水に付て悪夢と流るる和俗この船の内  
小種々の珍宝と重くする小宝船と称し近世これと

梓を鏡て見立市中に賣る 居家必用 船に乗る日月  
入と夢る時ハ古船を渡ると夢るときハ大富貴を

主る 今俗 二月二日の夜小宝船を布ハ 鯛味  
元禄年間より遙か後の多かりしなり

増 鯛味 増ハ肉味増と同く **十月**  
酒と以て煮熟して食之

袖の時雨 涙の雨をいふ同く 蒼高麥  
涙を袖のぬるいふ也

新蕎麥と秋と 早梅 范至能梅譜云冬  
至前已開故得早

名要非風 比越雪譜 雪車  
土之正

物雪國才一の用具あり人力を助るこも船と申ふ  
同じ且作るこいと易き一面とこも 形は輪み

如し大小定りあり我る物よ 我が国の雪冬ハ東らざる  
がいて造る木材ハ堅木を用ふ

ゆゑ冬ハ輪をつへハ雪小落入て撞事あり 輪ハ春  
の雪鉄石のて凍るる正二三月の間は用ふべき也

のあり其時よると 里俗 輪道はよりし 俳諧  
季寄小雪車と冬と ハ誤り 雪中の

物あれハ春の季ハ似気あり 古哥 小多く冬ふあり  
実ふ 山中 蕉ると 山 乃

薪と雪車を積り引帰ふ 或ハ山小曲りあるハ件 の如く  
小縛 薪の輪 葉片足と遊む これうて 道と

こも船と走らざる 此術 学びて自然に得ると  
ころ 輪と引ふ くれら 哥と謡 ふれと雪車哥と

いふ 則 蕉哥あり 漸く その家より とき 子の妻女子  
その哥を聞て夫の帰れりと知して出迎へた け 家  
小至り 青藍 云 俳諧 歳時記 近末 雪車の句  
作あると 多 小多くハ雪車は乗こ ハ 雪車ハ薪と積  
の 人 の乗あり く りの ハ あり ハ 云 ハ あり ハ あり ハ あり

冬 七





董集ふらふら、今つふ芝翫頭巾ふ似らる五元集目

巾一名御高祖頭巾用捨箱袖頭

室曆八年の字本愚痴拾遺物語ふ一兩年以前より

坊主品川へ通ふ高祖日蓮上人のうづり物より思ひ

つぎしし〇丸頭巾ハ今のハ大黒頭巾

のころひあふぶしも頭巾未考、露水 氷

て冬、つゑたき、雀 和名をみ

つゑたき、雀 鷹或ハツ

悦哉雀誠ハ鷄の 月の氷 御傘 冬にちりたりたさ

属雀鷄の雄み 月の氷 やのあふらりり水辺

ふあひ但し氷お移りる月の句体あふら水辺

べし新撰六帖のいさるひらりりりし寒ぬれ水

あふ空の氷 さあるとい 十二月月次

る月影知家 いして冬あり

祭 十日〇一年は兩度あり、 追儺 鬼やらの 周礼

ハ黄金の四目あり、玄衣朱裳文と執り楯と揚百歳

と即の時小儺ひも五雜俎儺ハ以て疫と驅く、古人最

ここと重んぶ漢より唐に至りて宮禁中ふこま

と行く護童假子十餘人に至る王建が詩ふ云々金

吾除夜進確名書袴朱衣四隊行、これ今即民間

この載あり但禹鍾燿と燃爆竹とのも、公事根源大

舍人寮鬼と勤り陰陽師祭文とり、南殿の辺り

著てここと讀む上卿以下ここと追ふ殿上人御敷の

方小立挑の弓蘆の矢あそここと射る、〇儺ハ江次才

裏書確と行ふ、晦日午前づつと二日、公事根源梅

日世諺問答疾囊抄亦節分あり、按ずる小中

華や、金吾除夜進確名とあれ、節分後のこと也、**ね**

兼三冬物葱 根ふら 大和本草大葱ハ五月

分裁り冬春さうあり、肥地ふらうくうあて、鞠々小培

バ白根長大云、故小根ぶらと称ス又曰和名抄ハ和名

細と云、紀の一字と名くる、子祭、子燈心 大黒天

故小一名一文字とらふ、

冬 一つね

紀事 凡商賈此月日子時ふと祭る蓋賣買  
の間この利を取と鼠の子の蕃息ふ比せんと欲する  
子小供する所の膳食品毎大豆と加ふ又二股大根  
と供す大豆ハ鼠の好じ食之兩股大根ハ俗福来と  
稱す○子燈心ヲ漢三才圖會毎十二月子  
の日子とと貯るもいふその處と云ふこと

年貢納

滑世雜談 秋收てむりハ秋月侍る  
當世多くハ冬月迄ハ皆済まらず

惣一年中貢ぐもの數多あれむ句体小なりて  
雜ふあづし○青藍云年貢納とつて増山の井  
及び芋環小と載せもあつてつて也  
今の間ふ雪のうきととつてもつてる前句と年  
貢もんとつてはちられもつり芭蕉又千鳥あぐひやく  
ふ寒うあつとつる前句ハ未進の高のそてぬ岸用  
芭蕉云いづれも冬季まつれり  
冬季まつて子細あつて  
な十月涙  
涙の雨まつて  
の時雨

兼二冬物生

海鼠

和漢三才圖會 海鼠中華  
金海鼠の海中ハ無之遼東日本の熬海鼠

と見て未生ふつものと見む故諸書ハ載らる所  
熬海鼠あり本朝ハ神代より 既ふこれあり回事紀  
ハ云彦火瓊杵尊の時諸魚皆仕奉らるるハ此ハ  
海鼠と云ふこと天の細賣の命細き小刀と以て其  
口と折く故今ハなつて海鼠の口折る是也  
鱗尾鱗あり皆山より浅青色又黄と帯る者ハ  
畧虎彪ハ似たるを以て虎見と名く全体疣多ク滑  
軟其腹扁くして白色常ハ水中ハあつて身ハ擴て  
薄く扁くよく水底ハ游行を如し物ハ觸るとまきハ  
横ハ縮る水と離るふ至て半片の胡瓜の如し其口折  
て齒腮あり其目切て珠ハ光あり共ハ小刀の痕の如し  
冬月盛ハ出ツ春月の終ハ尽く金海鼠ハ奥州金花  
山の海辺より出金色と帯ふ故ハ金海鼠と名づく○  
このこと天和本草 生海鼠の条云其腸黄ふして長し

冬 ちよ

酸味 貝焼 皆其食物の調味と温

鍋焼 本朝食鑑 秋名納の宇禾詳

納豆汁 或い僧家の庖厨と納豆

山祭 上卯の一年小兩度あり 十月 中

御神樂 公事根元 天子内侍所を行幸て御拜あり

殿寮幔と引く官人庭火とこき本末の座と二行よ設

紀事 官人内侍所より鈴と上る是神樂と

奏する義の御供水とのふらとを御又米とのふらの人鈴

の音と聴て仮り小鶏鳴とあして帰るはと年とる

何方ふ向いてと障礙あり 肥前国長崎ととし

世の部節分 長崎の柱餅 餅搗の日小終

事西鶴う世間胸集用 りむ 十月村時

雨 漢土あてハ秋種と下と本邦

兼三冬物六の花 雪の事ハ韓氏外傳 九草木

朱子語録 地六ハ水の成数雪 十月 宗像祭

水結びて花と成故六出 社啓蒙 胸肩社

延喜式 神名帳云筑前国宗像郡宗像の神社三座神

筑前大和山城以上三所ハ宗像の社あり三神共ハ

美蓋鳥尊の女ハ田心姫瀧津姫市杵姫といハ

咲の梅 室の内或ハ土藏の内ハ炉火と儲けとこと

と室咲の 十一月 胸稿 惟諸歳時記 年の暮ハ人家の門とら

冬 らむ

層とあらわし手と以胸と... 節季さしらゆく  
といひて錢とむいしりこれと胸搦... 三六番職  
人寄合ふこの番残まり今  
節季はといふ者是あり云  
**う**十月鶯の

子 こ 鳴 な 貞亨式此名ハ古抄より啼の字と結  
びて冬とあはれ... 鶯の子啼ハ名

目の長々... 啼の字とあはれ冬とあはれ... 彼を  
冬王のころより鳴君... 其子ふ冬の用あはれ  
ふいふとして鶯のこ啼... 子の字あはれ及...  
く... 青藍云俳諧歳時記ふ冬日鶯... 中ふ鳴これ  
と... 鳴... 此説おとあはれ... 愚按...  
さ... 少しの義鶯の子の鳴... といふあはれ

兼三冬物打餌 たの部鷹犬 浮寝鳥 うねどり

みの部水鳥 みづとり 薄氷 うすこおり 詩云戰々兢々... 埋火 うりか 拾後

遺埋火のわたりハ春のころ... 散 ちり ちりるるる  
る。雪と花と... 素意法師

大あて潤ふよつて名をも何洲の海濱ふ多... 養  
あてて京師の市ふは... その多く来る... 冬ふ  
用ふ。青藍云猿蓑集ふ二番草取も... 穂ふ  
いで... 前句ふ灰打... 一枚や  
のふ附われ... 句体うよりて難ふ... 十月

梅宮祭 うめみやまつり 上外一年ふ両度あり 宇賀祭 うがまつり

梅日 うめひ 九条東洞院あり則宇賀の辻と称す  
雍州府志九條鳥丸宇賀の辻云... 兩所とわふ宇賀祭  
の儀... 真言家の書ふ住吉の土俗十一月晦日家事と  
棄て... 倉稻鬼と祭る古の遺風... といふあり

探梅 たんばい 無言抄早梅と尋る心ふ... 馮字上探梅詩  
一枕悠々夢覺... 疎簾花影... 匪移... 起未  
檻外探春信開到東軒... 幾枝... 打寄て花入さ  
ぶと梅椿... 芭蕉翁此句と出され... 各春季の版志  
り... 羽甚むつて時物の表と聞て... 句の主人公  
と... 日頃... 冬... 冬季の服

冬 ふゆ りの

申されりもハ降こひまふ  
初雪の宿こし後りりり  
**十二月 温槽粥**

粥 八日 増山の井五山の中入禁中とも有と  
行事 温槽粥 鹽 鏡 燒栗 菜 茶 コニキリワカシテ  
井ラス云ハ 三水記 本朝のハ臘八粥と温槽粥とも  
今日造る所ともハ昆布 申抄 大豆 粉菜と相合し

ここと製まは是教尊成道の日あり 傳燈録 叙迦佛  
檀持山を非非想と學ひ二月八日成道ス 夏の正月ハ  
夢梁錄 十一月八日と寺院で臘八といハ大 波等

刹等の寺俱ハ五味粥と説く名ハ臘八粥云  
滑替雜談 廿日より乞人の妻ハ白棉巾と以て頭面  
と覆ひ腰ハ赤き前垂と掛手ハ藍と携へ遍く人家  
と無一米銭ともいふら成等と称し廿五日小至り  
止むとくせと節季ハ諸國あり成等とハ六京師  
ハのこありて

他所あり  
の 兼三冬物 鷓鴣  
鷓鴣のく  
ハ吉日とえらぶら

**十二月 荷前の使**  
吉日とえらぶら

抄小とそくハ諸國より献る御調の給  
と十陵八墓へ奉らむとてハの使ハ

**十月 口切**  
紀事 此月良賤あはく 茶会  
と催し親戚朋友と饗食と具と

壺の口切といふ今月の始より臘月小至り九膳食と  
会席と称し家の豊儉小随て佳有美味と求めこと  
と調梳折布小至る迄ことと新おを 中 九茶栗蓋  
の間小糊と以て堅く紙と貼本風濕茶と侵んことを  
念ふ故あり初冬小至り小刀と以て紙と貼し合縫を  
截蓋といらく茶を取これと壺の口切といハ 利休曰  
壺の口切の節ハ橙黄と橘緑りの時

○口切や汝とよハ金の事 其角 **兼三冬物**

**懷爐** 湯婆 温石の類 病身虚  
弱の人懐と暖るやあり **莖菁 莖漬**

本朝食鑑 莖菁の葉莖と採り 菴菊とハ收藏これ  
と莖漬と号し年と経て又佳く江州の製造と近江  
漬と号し珍とも年と経て酸味と生むものあり佳  
ふハ賀茂の里人の造ると酸莖と号しこれと賞美ス

冬、 ねく

# 朽葉

一説小くち葉ハ色と結びて冬をより朽の字重き故あり

# くさくさ野

八雲御抄 冬の野とのハ〇冬野の枯くさくさ野とのハ百濟野と混ぶる〇くさくさ野のさくさく下ふあく鷄

そのもわくのふ冬ハ鷹の類ありて大小得意者未あなり道因法師 鷹の類ありて大小得意者

皆鷹と同じ鷹より大あこと三倍せり雖ふ似て小く天和本草中上ふハ角鷹とも養鳥捕ふ

草枯ふ手あてて 和漢三才圖會 鯨音 鯨字海鱈勇力奥 葉

枯 鯨突 伊佐奈 狀ち畧鱈ふ似て肥て山く長 周りと等し 其色蒼黒くして鱗あり鼻の上の骨高く起り頂

の上頰の前ふ潮と吹穴あり口闊く下唇上唇より長くして頰の前ふ出て舌もまろ廣し凡鯨六種あり

性喜て鰯と嗜し諸魚敵せむ海船若尾鱈ふらぐときハ必覆も冬ハ北より南ふ行春ハ南より北ふゆ

肥州五島平戸辺ハ節分の前後と盛ると紀州熊野浦ハ仲冬と盛るとこれと捕ふ鯨と刺鯨と呼て未

とりの樺木と以て柄とあり鯨の頭は細と着て船の柱あつち其鯨中るときハ柄ぬけて肉ふ入鯨の動作

ふちとひいて深く肉ふ入て抜き鯨の柄後るととも繩着てある故小失をも一船の進退と掌と人と呼て羽

指といハ長き袖短き衫と被て穴も軍船の如し近頃大繩の細を用いて鰹めことと繫き木柱に擲故ふ百り

一失 十一月 獻履襪 崔浩儀云近古婦人常小冬至の日と以て履襪

履 和名之 越谷五山遺稿 我朝の製ハ大指のりれめし足袋ハ元 空也忌心 三日曉の鉢叩 空也上人ハ天禄

末襪あり 寂も年七十し元亨秋書ふとそり〇空也堂ハ極樂寺と号も四条坊門の南堀川の東ふあり鉢叩

ホ此堂と守ふ傳ふ云極樂寺ハ元三条掃箒あり掃箒道場と称もむり空也上人勝光夜々執行

念佛と唱へ浴中と巡る北山ふ任るとき毎夜鹿束る上人其声と愛して閑居の友とも一夜束らむ心

冬

小怪む明日獵者来りて云昨夜この處に於て鹿を  
 殺し上人大に驚き悲しむその皮と角とをこぼし  
 皮と角とを角と杖頭を挿て遺愛の物とて獵者も  
 又こぼし悔い愧て忽ち剃髪して僧とあり今この鉢  
 挿はちの齋多し空也晩年修行のころ京と出て東行と  
 徒弟小謂ていよく今日寺と出る日と以て予が命日と  
 定めよ故小其日と以て法事と修まこの院中十八家  
 けりこの中年老のもの剃髪して僧とあり代々空の  
 字と法名ふかふの餘は有髮妻帯して常小茶釜  
 と製し市中小賣る九十一月十三日より四十八夜の  
 夜々市中洛外の三昧と巡り各鉦とあり佛名と唱念  
 じ或ハ竹杖と以て携ふるところの瓢とあり口無  
 常の詞と唱へ施物あるときこの瓢を受く瓢と以て  
 鉄鉢と代ふ故小鉢挿鉢も打くところの竹杖ハ貴  
 船櫃上の竹と用ふ上人暫く北山貴船櫃上の菴に寓  
 居の遺意風俗文選鉢挿辞去云かき修行の瓢  
 簞とあり鉦打キ一人三人つてもうへへのけ  
 合この瓢ハ其唱哥ハ空也の作あり中畧常ハ杖の先

小茶釜とあり大路小路よ出て齋中冬ありんか  
 中冬とあり或ハ四方ふらけ法師ありなまの衣引け  
 たれども墨染ありわくはくハ萌黄ハ鷹の  
 羽打ち人々も紋とつけ著るも月雪ふるも甚之  
 承と越人も負し侍中横雲の影ありんか  
 声して出来たりけ小老と足ありんか  
 小とありんかされてひり今おありぬらん小の長  
 喘の墓めつる鉢と聞き聞えぬハこの曉  
 の事ふとえつる吾山遺稿鉢と聞き瓢と聞き  
 て瓢ハ和讀無常とありんか来りんか誰ハ此苦と  
 の事ハ花ゆかりありんかゆいんか名むんか  
 残ハ此和讀多し略之此哥と名をりんか  
 小瓢いづれて  
 勸進ハ  
 十二月 藥食 麩漬 本朝食 鑑邦  
 鹿と食と者穢忌多し此加茂春日の神使  
 の故小故小世人鹿の訓と忌と音と以て鹿ハ鹿  
 肉甘温と毒ふ冬時小食ふ他月日し  
 を故小寒中時小用之中と補い氣と益一切の凡塵  
 冬く







化の力とぬまるとしてこれと成怪び  
**蓀** 此寒と牡丹の花のまの標車  
**兼二冬物**

**雪吹** 雪爪相交ると  
**雪吹倒** 北越雪譜暖  
園少てハ雪吹

と花のちとまのふ擬しと。詩作詠奇あ  
**衾雪** こと吾國てハ雪吹ふあ者ハ九死一生

**玉海集** 奇枕とてくもる也  
**衾雪** 山姫の味道具ふ

らハ衾雪のうりてハ根さうり上のふもき雪の氷の  
水と蔽ひくると氷の衣とくふ同く雪の物と  
厚く蔽ひ包くと衾ふこととてのあふ

**士** 御今ふハ下のぬふりあける雪ハみ月の  
望ふけぬれハその夜よりりるとよめる万葉

の奇と引て難と無言抄ハ赤人の田子の浦の奇  
新古今冬の部ふ入りて冬とて句体おもふべし但し

**毛吹草** 毛吹草のくひまて冬季  
**衾** 古き衾  
厚衾

小入たるうと多ればハ毛吹草とて  
**敷衾** 小衾 和漢三才圖會衾寝衣の古き衾哀情  
紙衾 白氏文集 鴛鴦瓦冷霜花重舊

枕舊衾誰與共の紙衾ハ紙ハ造るるあり貧賤  
の者の用ふるテントジ是あり蓀蓀た目ハ我手

のわと紙 **蒲團** 本草綱目蒲席教名云薦  
皆蒲及び稻葉と以てことと

**衾** 曾良 為る精粗異なり兵人龍鬚草と以て席も  
今縮布と以てことと為るとも蒲團と

**柴漬** 正字釋冬小魚と取ふ柴と多く減ひとの  
内小餌とをれを江小沈り置ハ江中の魚集り入其下

ふをくハ細と入引上て取あり城州淀伏見の江  
多くこまありハ夫木ふつけしをら下ふまひま

のんとされき身と **河豚魚** 河豚汁 腹立鯨 古方  
西施乳 邊津

豚ハ猪の小さき者其性よく噴ふ故ハ憤豚の称あり  
魚中鯨鮫まこよく噴ふ故ハ河豚の称あり 北山經

其腹臆と重し呼て西施乳とて陶覽云河豚魚  
小くハとと擲及び大魚故て啖をま唯人小毒を

のふあを又よく物と毒を煮るこまハ煤始中ふ落  
る事と忌む肝及び子小大毒あり食べざるを

**滑**

冬

雜菜 和産小腹立鯨とて河豚小似て小き魚なり味は劣る是と地小投又ハ木の枝と以て動つれときハ魚腹と立て鞠の如くふくくもこれ本草小云鯛魚腹脹大田原うそ泡の如しといふ是あらん難波の浦又蝦の浦とよまう侍るも之河豚の類あらん冬風季小用之べきを○俗韻字と用之誤之類ハアセシ

呂吹大根

骨董集 甲陽軍鑑云熱風呂好く吹申さる云 本朝諸士百家記凡呂とてあまを条ニ云上手の吹手一兩人云伊勢人の物語と聞小風呂と吹しりハ空風呂ふあらしと垢と吹くもの凡呂ふゆる者の身上小息と吹うけて垢とありあらし息と吹うける所小潤ひ出て垢と落るありと云と凡呂吹しり云と大根と熱く蒸して煙の立れとあると大根の凡呂吹しり小息と吹うけて食ふとまうれ凡呂吹しり 冬籠 寒風とせきて呂吹小似るゆゑありん 居宅小籠ると

新撰六帖

あられありんもの岩屋のよもりのけりけり

芭蕉の草木の凋冬枯るとも冬籠るとも古今也

貫之 寒氣を防ぐ料凡のうらとらと云と云之 冬構 砂よけ凡よけと北の方小庭を張まらし

すつと冬向の弁 冬之蠅 續虚栗少くまればなる

冬之蜂 猿蓑 今ハ世とよのむけり 冬之梅 寒梅

大和本草 八朔梅ハ八朔のころよりひらく花小なりて八重なり西土とてことと寒紅梅とつハ冬に至て多く

ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土とて清香と

り九月より開く八重なり但九月小開くハ狂花と云

臘月小開くと正時と云 冬木の櫻 ころせし

冬枯 小樹あり花葉彼岸櫻小似てこの枝

の櫻あり 冬木立 夏木立ハ茂るころとい

机の傍小賞も又 冬木立 冬木立ハ葉の脱落と云

八重櫻あり稀

冬ふゆの月つき 源氏朝顔の巻冬ふゆの夜よの月つき

色いろまきかの身みしめて此こ世よの外ほかのことまておひんあ

けさせとあふ河海かかい抄せう日記にっぴ云いふその望もちのころ月つきや

あつふかのころ人ひととわれをままの師し走はの

月つきあわのころとつりはままのころ批ひ草くさ紙しとまままのころ

夜よ行ゆ燈とうで水みづ菜なをまり冬ふゆ田た道みちれは驚おどえん冬ふゆ

椿つばき早はや咲さのころ冬ふゆ枯か草木くさくのころ冬ふゆのころ草くさ

洞ほら冬ふゆのころ山やま草木くさく枯かて淋しみ冬ふゆのころ川かわ

吹ふ革くわ祭まつり 八日祭所ところ智ち恩おん寺てらの鎮ちん守しゅ元げん智ち明めい

荷か八はち幡ばんとまままのころ稻い荷かの火ひ焼やくのころ冬ふゆ

十一月じゅういちがつ八はち日にち鍛た冶や鑄ちゆう冶や石いし工こうの徒たもも冬ふゆ

明あ吹ふ革くわ祭まつりのころ家いへより檣かき柑かんと投なげる群ぐん重じゆう争しゆうひてこ

十二月じゅうにがつ札さ納な 初鯽うなぎ この部注しゆス

冬ふゆと惜おし 向景明めい除じゆ夜や詩し云いふ今いま年ねん今いま日にち

更さら衣い 公事根ね元げん十月じゅうがつ一いち日にち先せん御ご夜やがあわる掃は部ぶ

會かいのころとまままのころ旬しゆんとま申まをん

興きう福ふく寺てら法ほふ華け



物と衣との小同ト、水の水と蔽ひたるまゝとてあら

ていふものゝ上に出せる句意と推ても、但半浪

草不出せり説、**氷の花** 西陽雜俎 開成の末河陽

附会といふべし、**凍** 注不凝 煮凝 遠近集 煮つみそや

如し、**火燧** 置炬燧 骨董集 火燧といふも

のあり火燧のまき以前ハ物ハ尻けて火鉢よきこと

暖めたるより古き絵巻物ハその体よりなり、**落葉**

こつぬ旅のさうり、**木の葉** 落葉 かくせと落葉

や置こつ甘蕉、**木の葉** 木の葉松て

いふときハ同ト別ていふときハ少し趣意がひあり其

意と得へし、つれく草木の葉落るも先落てぬむ

ふハ下よりさきさきつらふ、**木の葉の雨** 木の

葉ハ時雨、**葉ハ時雨** 百氏文集 風吹枯木 暗天 雨 千載集

まゐらある槇の板屋小音ハてむら

ぬ時雨や木の葉の葉衣 南越志 撞入冬 鷓毛

太平廣記 女仙部ニ云 秦 この葉と雜て衣と

の時婦人草葉と衣 この葉と雜て衣と

**兄鷄** 鷄の雄あり脚極めて細くしてさきとや、

よき鷄以下の小鳥と捉るちつと、

**十一月曆の奏** 朔日 公事根元 中務省より

ハ主上南殿小出御ありてこれと御覽あり、出御あり

ときハ内侍所あつて曆と奏せり、欽明天皇十四年

百済の博士が奉る、**雍州府志** 曆毎年南都幸徳基

小加茂氏の新曆と受く梓小鑊めせ小行り、今專

大経師曆と称と、○今免許と蒙りて曆と販く所

山田勢三嶋 伊江 武藏 南部 奥世小南部のめくら曆

といふ多く重なり、**五節帳基試** 中の世 御前試可

日月の識、**五節帳基試** 中の世 御前試可

醉中の童女御覽日 公事根元 中の世の日と、五節

狩の使、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節

帳基の試、**帳基の試** 中の世の日と、五節





山とていふ。未申の時をうらふ非時。法師の法  
 本へ下りてあれば、方寄合て事と名づけし我々世事  
 して食事をしつゝ、いふ事と載り接ぎふ。十二月の  
 日の短き頃、年の暮の事せりくる。故に八月と浪  
 二食とある。當時の僧家の風俗ありて、事納と多  
 二月八日も漸く、元日八日より三度食する事始り  
 といひ、やむをば、**江戸鹿子** 二月八日事始り、**二月八日**  
 日事納。今の俗、二月と事納、十二月と事初、やりのあり  
 り、正月の式、やりのし事、やりの。○金公事と  
 つも、いふて事納、山庄、此外十二月と事と、あつての  
 證も多し。今日のこと煮と食と、**選寛紙料**料理物語、  
 云、いふ、いふ、いふ、豆腐、豆、腐、芋、大根、焼栗、ら、いふ、いふ、  
 中、味噌、や、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 飲、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 此、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 方相の目、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 小籠といふ、八九字の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 この部事始の条とも、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
**五條天神**

節分勝の餅賣

祭る神大已貴少彦名より祭礼

白木漬

九月十日小行、毎歲節合の夜

京師の士民、恭請多し。白木と買てこれと自家に燃く  
 又小團子の餅と食ふ。この餅社の傍あり。勝軍、  
 小供も、所の餅あり。よりて勝の餅といふ。或は、いふ、  
 とうもろこしといふ、より名をもとめて、いふ、この二物、  
 ころして、官より、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 その料と社司、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
**新撰**

卷納曆巻返

古昔、いふ、多、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 世の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

十月夷講

廿日、或

の家例、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
**本朝通紀** 推古天皇九年三月、聖德太子始り、  
 市を設けて、商買とを、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 いて、商買鎮守の神、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 と設る、日本紀、いふ、いふ、いふ、いふ、  
**國三穂**の、いふ、いふ、いふ、いふ、  
 冬、こ、え、て

この故ふ今日うららも、鯛と供又煙子の像  
前ふおろく賓主相混ハ盃盤器物ハて使  
價と定む或ハ十兩或ハ万兩賣る者諸ハ

の歳ハ液雨ハの部時雨  
兼三冬物ハ悦哉ハ

の部雀ハて兼三冬物手焙ハ火焼の  
の条ハ注すハ小テ者

教ハ十月殿上の洲醉ハこの部五節  
十月ハ

天智天皇御國ハ公事根元ハ京福寺ハて  
行ハ朱鳥二年ハ

くしもの天智天皇ハ舒明天皇の御子御母ハ皇極天  
皇あり御位ふつろきハ近江國志賀の郡大津  
の官ふはしハ中良の君ハおハて國忌の  
事ハありハ太祖廟ハと申ハもハ宗福寺ハ  
近江國志賀寺ありハかハの寺ハと詠ハるハよハハ

雲御抄ハあり天智天皇の御時ハの地ハ瑞ハ花ハ  
る故ハ精舎ハと建立ハとハ元亨ハ教書ハとハ

十月秋無草ハ蔵王ハ花ハとハその名ハとハ

秋無草ハ兼三冬物ハあハらハむハらハのハ

部鳥ハの条ハ華躰魚ハ老躰魚ハ鰻魚ハ琵琶魚ハの  
小注ハすハ諸名ありハ寧波府志ハ鰻魚ハ

蓋其腹ハ帯ありハ帷子の如ハく生ハして其上ハふ附ハく故  
ふ名ハくその形ハち科斗ハの如ハくして大ハふハの盤ハの

如ハくハ吳都賦ハ琵琶魚ハ鱗ハとハ形ハち琵琶ハ魚ハ似  
たりハ大和本草ハ國俗ハ鮎鱗ハとハ称ハすハ未ハぶ出處ハとハ凡ハ

恐ハらくハ七ハ拾ハふハ一ハ坂東ハ多ハしハ網代ハ網代木ハ  
西州ハハハ掃ハハハ冬ハ味ハよく春ハ味ハ劣ハむハ網代ハ網代守ハ

指掌雜学ハ魚落潮ハ来ハるとハ魚ハ其中ハハハ潮退ハく  
こハハハ魚ハ出ハ秋ハの枝折ハ網代ハと書ハ網ハの代ハとハ

魚ハとハとハ宇治ハ近江ハの田ハ上ハとハ水ハ魚ハとハ  
んハとハふハつ物ハ藻塩草ハ網代人ハとハ宇治ハハハ網代ハと

冬ハあ

り所ありとてを住家として網代と司る者との網代守網代人とらふなり  
榎葉えのへとて最殊もふもを  
細代守文章こほしろとてきとじ  
厚氷あつこ 神代記かみしろ北方水  
音や夜更の網代杭林陰

日の思やあちまら  
霞あせ 玉わりん 大戴礼 曾子云  
あちまら水子葉 酒 陽の専気霞

陽氣博してとて霞と相入るとて消散  
下り水小因て霞とある○霞酒ハ南都の産又  
雲酒あせとも酒中霞ふ似たる糟あり天子集玉より

由酒ありとて霞とれ○年浪草ハ霞地の錦霞  
ホを冬に季の部み出せるハ古抄こせうハ雜とて

あかけの鷹あかけのたか 和漢三才圖會わかんさんさいずゑ菓と離と自來食  
るべき捕へ来る者と網掛とらふ

新撰六帖しんせんろくてつ山ごるあかけの鷹の手まね 霞魚あせういの  
てのこころおろく君やもあるれ為家

くろの糸 赤切 十月 赤豆の粥あかあじのあじ 荆楚  
歳時

記共工氏不才の子あり冬至の日と以て死して疫鬼  
とある赤小豆と畏る故に此日赤豆粥と作り食し  
と穰とら あからの  
増山の井本邦也の冬至ふ  
とて赤小豆の飯と用ふるもあり 榎葉  
膳まもり外ふれあり赤拍 良品 相嘗祭あひむけ

上ノ印 先代旧事紀 今日天皇正統殿小幸し三公  
九卿と徴相嘗の詔と宣下りもハ三輪住吉熊野熱  
田廣田射駒降劔大和津島の大社と祭る其國の  
國司小舎じて其國の宮倉の初米と以てと供其  
社司神巫ホ官幣と賜ひて禘礼と行ふ 阿知女あちめ

公事根元 この祭也きとて絶て  
かの部神集  
の糸り出ツ  
十二月 淺草觀音追儼あさくさくわんおんしゆいげん

除夜よ 江戸金竜山淺草寺小あり今宵赤頭堂  
り七日 中ノ充つ初更のころ鬼形おにがたの者一人堂み小  
出又一人方相氏の假面とくありる者これと追堂  
と巡る後除疫の札三千枚と撒して諸人ふ興ふ本

冬、わ

詣の人各争ひ格うし持  
てりて自家の門下也  
**十月** 殘菊

公事振元 昔菊花の宴九月九日や又  
殘菊の宴と十月五日に行きうりこれ  
群臣詩と作して酒と

山茶花 和漢三才圖會  
其樹葉花實

霜の異名あり 秘藏抄 さはひの  
やぐさ宿のませのつちふら

さはひの  
寒き夜 ○有明  
寒き朝 少なり

連 字彙 冷  
清甚也 寒き  
寒のよき者より車小似て鶴  
より小 鶴ととも 朝鮮あり

十一月 里神樂  
連奇秘抄 内裏の外と悉く  
里神樂と云 私の心 居所

侍河と山神樂と云ふなり  
十二月 寂勝寺

灌頂 五日 名勝志 土人云寂勝寺の旧跡八岡崎村  
の西二条通の一町をり 西ふあり 櫻

田と云六勝寺の其一也 以呂波字類抄 保元三年上  
月十五日寂勝寺にて灌頂と始めて行ひ大僧正覺  
明と以て大阿闍梨とて此寺の櫻と詠まる奇

わけてとていふるの春をとしを白川の花の下陰  
さのり 齋宮ハ伊勢國多氣郡ふ  
あつ今齋宮村あり多氣の

齋宮の繪馬 晦日 齋宮ハ伊勢國多氣郡ふ  
あつ今齋宮村あり多氣の

都或ハ竹の都と名 増山の井 齋宮の樹下道の傍  
小き祠あり晦日の夜里人繪馬と云ふ事あり行疫  
神とあてひるまことや天王寺の道公法師熊野

より帰るさ小この樹下小高し繪馬の神あり  
行疫神の馬に乗る音と云ふこの繪馬の神前  
まらうとてりつてありとて法華經讀誦の功力

ふよりこの神補陀落山ふ生 觀音の眷屬と云  
つらうり 侍り 奇宮ふ諸民詣て繪馬

と掛ふとの毛色とて未年  
の秋の農業と占ふと云

歳藏市 江戸日本  
橋の東二

冬 ささき

町せうり四日市あり三河万歳江戸小来りて勝士の  
才藏と傭ふあり毎年四日市をてこの價とさるるを  
傭ふとらふことと  
**逆菘** この部同見  
才藏市とらふこと

**冬物銀竹** 羅山子曰銀竹ハ雨といふあり李白  
詩云白雨映寒山森々似銀竹○

垂氷と雨切干製 切干ハ冬月菜菔と切ると糸  
と雨説し 切干ハ冬月菜菔と切ると糸  
の如くをさると織薩勤云

悉く擽け晒乾を故切下 **金海鼠** 鼠の部上海  
と名く尾州多く製之

**北窓塞** 漢志天陸ハ北方北ハ  
伏し陽気下ニ伏し

**宮線** 荆楚歲時記 晋魏の間宮中紅線を以て  
日影と量る冬至の後長きと一線と添

文昌雜錄 唐の宮中女功を以て日の長短と  
換ふ冬至の後常の日ハ比し二線の功を増し

**衣配** 年のそしめの料小あきき入々み衣を贈り  
とり入宇津保物語源氏玉葛の巻亦ゆと

**十月維摩會** 十日より 南都興福  
十六日迄 寺小かひて

この會と開く 元亨秋書齊明天皇三年十月内臣  
鎌子山階寺と建ッ維摩會と修を陶原の家小於く

山階精舎と創り維摩會  
と説く是維摩會の始なり  
**兼三冬物雪** 天藏  
地積陰温うあるまきハ雨より寒あるときハ雪とあふ

春秋元命包陰陽疑て雪とあふ雪ハ五穀の積なり  
○六ツの花玉の塵 兼雪 雪吹雪吹側これ雪ハら

雪かどむら雪ハらり雪粉雪降小米雪以上頭字  
の部ハ **雪花** 韓詩外傳 九草木の花多く五出  
花を

風やゆる夜ゆるふ雪の花 菊也 因ふ云此雪の花の  
句ハ五月雨やゆる夜ゆるふ松の月とあふ雪中菴參  
太が句より **雪消し** 紀事 十月多く雪やの貴  
ハ先吟あり 賤粉餅並ニ菓実ホの物と

文  
ゆ

互ふ贈る是と雪海しとら言さういふ雪まゆき

これと食へむ寒気と忘るるの語あり

御傘まゆき冬あり時雨ふ風のそひらふらふあり

雪のそひらふらふと雪まゆきといふは雪吹ふ似る物あり

雪空 雪の降 雪氣、雪催し 雪け、雪とと

新撰朗詠 苔庭木落紅無跡雪確

小裏表あり雪の声嵐雪○青藍云月令博物茶ふ

静小窓ありあつら音と入り云愚按さるふらふと

月晴とらふ小合を樹木或竹ぞく積 雪めとし

北地あり雪おとらんといふは雪のそひらふらふと

又深雪のうら物のちりふ立おくと雪竿と

寒氣指と墮とてふ 雪礫

是は霜なりと同じ

雪打 小石の如く雪と桐とらふ

投打合と云雪中の戯あり 雪轉

続虚栗 君火のけよま物 雪佛、雪布袋

新拾遺詞各 雪あて丈六のむらけとつ

枯尾花 此下ありくねむらふ雪佛 嵐雪

○雪布袋、雪達磨とれ雪中の戯よ作る 雪獅子

張文潛戯小雪獅子 雪女 深山雪中締ふ女の良と

と作る文あり夏冬 現まこれと雪女のり雪

の精ふ 雪の山 雪山と音ふりふとて 雪の肌

天竺の山の名は難とん

女の肌の白きを雪 雪履 不及、雪垣 北國大雪

ふらふら十月初より用意しし人家軒まうり運

しき丸太材と立掛て横と結び貫と編り付て垣ま

深雪の内其陔と道として隣家

へ通まらふられと雪垣といふ

十月 虎耳

冬 日 ち

艸 つくさこ 一名キジノ艸 花ハ四月ノ  
雪の下より名ふ付て冬本とせらる

年 炭俵 行年よ京へ  
**め** 十二月 和布前  
あまの状なる湖春

の神事 毎日長門國文字關の北ふり人車人の社  
称も祭る神五座玉依姬彦火々出見

豊玉姬不首合河度目磯良より祠の後入一巨石より  
石の鳥居建鳥居と出まじ石礎ありて海の底小連

を虚潮日こいともこの窮むる所とせし十二月晦日  
夜四更祝衣冠帯剣と鎌と携へ炬と拳石礎と下

己海入和布前帰る終夜祝詞あり元且和布と  
神前小奠し既りてこれ **み** 兼三又物雲

撒し國王小献りたり **廣雅** 震ハ雨雪雜り下るあり○ここれみこるとも

とせらる 深川集 附御簾小こる下加茂の社家  
**みどき酒** 霰酒ふ **三の花** 霜の異名あり博

物筌水の花の轉

音とも又雪と六ツの花よふ **水夷** 鳥中小水  
と出まじ

ゆき霜と三ツの花ともいふ **水鳥** 浮寝鳥 ○時珍曰水鳥ハ夜夜水禽  
味長くして尾促る ○浮

寝鳥水鳥といふあり 堀川百首 水鳥の玉藻の床  
のうき枕あつておのいれうまきまの匡房御介

水鳥ハ昼もよく寝る物 **鷓鴣** 桃虫巧雀、女匠、  
稷雀、巧や巧婦、

故小夜分ふあらむ、  
桃雀ホの諸名あり ○時珍曰状ち黄雀小似て小し

灰色ありて斑あり声吹嘘々如し喙利錐のごとく **葦**  
毛虫と取て窠と為る大と雞卵の如くしてこまこと

繫く小麻髪と以てし至て精密とあて樹上小掛或ハ  
一房二房故小莊子小云林小巢くして一枚小過七頁

享式古抄小秋みりて渡り鳥の部小入とせし **山雀**  
日雀の類小あらで存鶉の物小連立とて民家の軒

小馴て馬防と傳ひ水棚小あてい声の清とて **琴更**  
小寒し春帰る姿もとせらる **木兎** 和漢三才圖會  
決し冬とせらる **木兎** 日本紀用  
此二字

大さ兒鳩ここのの如くして全体褐黒色こげ小白彫こしろの豆まめ似  
 うらめのみ人臆胸おそむね亦同色横よこ小小白彫こしろあり相あひ互ひたひて蛇腹へびはら  
 の文ぶん小似こにく人頭ひとがしら目猫めねこの如く眼まなこの外うしろ白圈しろまと作つくまま眼まなこ中  
 黄赤きせきやてよく旋轉くわんてんま毛角けつかく小こ小こき點てん志しありあり夜よ声こゑ  
 梟きう小似こにくく世俗せきよく頭巾かぶとと鳴な鷄けい蒙もうりり或あるハハ冬ふゆ年としの  
 皮かわと以もつてて四よと作つくて諸鳥しよちうと執とると貞まこと厚あつ式しき古抄こせうハハ秋あきの部  
 小入こいれとと渡鳥わたどりややああわわららひひ色いろ鳥とりややししららららとと鳴な声こゑ  
 の物もの達たちききハハ寒ふゆをを厭いとへへるるももああららもも決きして冬ふゆと定さだむむじじび  
**水酒** 続つづ様さま蓑かさ水みづくく池いけの中なかより道みちありありことことららるる  
 句く冬ふゆききふふつつれれるることことららるる冬ふゆ季き勿な論ろんふふしし

十二月 深山莽草

真木まき高たかく上かみららむむ好このでで偃えん臥ふしてして藤ふじ蔓まの如ごとく其その色いろ  
 灰白はいはく葉は莖せい上かみふふ叢そう生せいむむ冬ふゆと凌しのぎぎて周まわりりもも形かたちちち蓬ほう菜さい紫むらさ  
 の葉は小類こるいして長なが大おほあり冬ふゆ梢しやうの間まふふ五ご出しゅ碎さい花かと香かほく  
 穂ほととなりなりて簇あは生せいもも彩さい紅こう褐か色いろの实みと結むすぶぶ樟しょう柳りゅう小似こに  
 て大おほハハ和漢わくわん三才さんさい面会めんかいハハ深山しんせん搖ゆととりりハハ四月しがつ細こきこ白  
 花はなととひひららきき秋あき實みととひひももふふららハハ同どう名な別べつ種しゆちちららんんハハ

十二月 御髪上

殿官人てんくわんにん松明しょうめいと献けん衛士ゑいしと勤とむむと勤とむむにに往むかひひ多おほく午うの日ひ  
 と用もちひひららむむ公事こうじ根元ねげん藏人ざうにん御ご入いれけけりりとと給たまははりりと  
 主殿寮しゆてんりやう小こひひりり 衰おとろ和わ田でんのの鯉こい取とり 鹿か支し日ひ此こ事じ古こ  
 ひひてて也なりととありあり 式しきハハ偶ぐう和わ及きか  
 苜もく環わん小こととええりり 和漢わくわん三才さんさい面会めんかい鯉こいハハ城洲じやうしう淀川でんがわ最ももも良よし  
 武州ぶしう浅草せんそう川がわ常州じやうしう箕ひら和わ田でんととふふ次つぎ 本朝ほんてう食じき鑑かん箕ひら和わ田でん  
 の鯉こいハハ流ながとと濁にごららひひてて清きよららむむ江え近ちかくくもも湖うみとと通とほるる  
 魚うい稍しやう肥ひてて脂あぶらもも多おほししハハ里人りにん寒ふゆ中なかふふままとと捕とらるる鯉こい其  
 大おほハハ三さん四し尺ぶち間ま漁人りしゆにん小ことと 三さん冬ふゆ冬ふゆ冬ふゆ 初冬しよふゆ仲冬ちゆうふゆ季き  
 此ことと懐なつきき捕とらるる者ものありありとと 冬ふゆ冬ふゆ冬ふゆ 冬ふゆこれこれとと三さん冬ふゆ  
 ととりりハハ万葉まんやふ三冬さんふゆつつとと春はるははれれどもども梅うめの  
 花はな君きみううららむむハハ折をりり入いれりりハハ大伴おほとも家持いけもち 志し 十月

焦糟と食ふ

朔日しやくにち事こと支し類るい聚くわい 吹ふ人ひと十月じゆがつ朝あ日ひ多おほ  
 煎せん楚その人ひと多おほく焦せん糟そうとと 十じゆ夜や 廿に日にち 無量むりやう寿じゆ經きやう此  
 食じきふふああららむむハハ糖とう小こままをを 十六じふ日にち迄まで 小こ於おてて煮にくく

冬 み 志



まると十日十夜あまの他方諸佛の國土ふ善とあつと  
千歳ふ勝れり故の十夜とらふの洛東鈴声山真正  
極樂寺真如堂台と以て始と本尊慈覺大師の作  
ふ此像冥驗ふより別時念佛と始むと十夜と  
り蓋伊勢守貞國十七日○洛陽惠日山  
としつとこれと修む **聖一忌** 東福寺開山忌

也紀事今日方丈ふ什物と飾り午後聖一の像と腰  
輿に乗て寺僧前後ふ道從ひ經堂の須弥壇ふ安置  
を此開山忌昨今と年中遊覽の終と故ふ舟嘗納  
との入聖一弘安三年十月十七日寂も偈日利生方  
便七十九年欲知端的佛祖等 **時雨** 夕時雨  
傳云の真筆と開山堂う揭 小夜時雨

益夜のわらふく陰晴と論せむ時々急雨ありこれ  
と時雨とらふ初時雨村時雨泪の時雨袖の時雨川  
音の時雨松風の時雨各頭字の部ふつらて注を○  
液雨時珍曰立冬後十日と入液とらふ小雪ふ至て出  
液とらふ又蒸雨とらふ百虫とらふと飲とらふ伏蟄し  
て来春ふ至る云和俗液雨とらふと訓も時節と取

兼三冬物 霜見草

合せて 冬菊の異名を  
松の木けの霜見草うゑ **霜** 今朝の霜 朝霜  
夕とともハともあふら後に **霜** 霜夜 霜日和 霜解

毒あつて物皆喪ふるあり○青女さひひを  
三ツの花ボの異名あり各頭字の部ふ注す **霜**の  
花 **筆** 天至中青州盛冬ふと濃霜 **霜**の  
と屋瓦ふおく皆百花の状とあす

集 落葉衣とらふ霜の劔うね実次○霜と劔と  
とつと又劔と霜とつてりふあり **新撰朗詠霜詩**  
女雄劔在腰技 **霜柱** **新撰六帖** 谷うさ若屋とせ  
則秋霜三尺 **霜** 霜柱 **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱  
らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

らん光俊 **霜山崩** **霜** 霜柱 **霜** 霜柱

冬 志

つゝ衣笠 **霜とん** 同上 夕の山の前を歩く  
内大臣、  
光俊 ひこ二集 夕薄のり日ハくく霜とんて河

○昔蓋云上ふむげく奇の意とゆゑ安来と霜と  
まて空をこりてく霜の **霜の鐘** 山海  
ふらふこのあも霜ハ晴天ある物也

山ふ九鐘の霜相 注云霜ふるまに  
金気應 虚栗 盆山の金霜ふ帯 寒し芭蕉

遠近集 つゝとも 此鐘ひく霜夜の重宝 **霜の声**  
宋邦経霜鐘詩 響沈 落声遠帯霜残

匠材集 霜の音 注寒時ちくく霜の声其角 **霜**  
云 句兄弟 酒々き薄團みき霜の声其角

の鶴 霜夜の雀と霜の雀と **霜た**  
み 古式小載を按むる小霜柱小對して **霜の袴**  
一面小載を按むる小霜柱小對して

義未詳 作例とあひて後勘と俟の 遠近集  
霜と袴者とくん五ツ子の橋の霜保友 おくとら六

竹物の霜の袴 春遊 降霜の袴者 注六ツ  
の花保友 玉海集 日あ入まて破る霜のあこ

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり

霜やけ 霜の音 **霜の雪** 木の葉ふくつり  
霜やけあり 木の葉ふくつり



十月 氷魚と賜

公事根元 更衣の節 全  
み三献の後 氷魚と賜 終

の花

五出細き白花とひらく 天和本草 狗骨本草  
時珍説ひらきふあへり木皮と煎し鳥もち

枇杷の花

夏のひの部 枇杷 和漢三才  
の実の奈小産を 鵲

雀の如し頭黒く白き尾あり俗霜降るる類類正黒  
背翻灰赤やく黒き越あり翅の上白き羽黒羽あり  
こと層々より此脚蒼黒其声清亮ありて多く鳴る

又黄鵪あり貞享式 古抄ふい渡鳥の部ふ入る其  
名もとのまも朝霜の気色といふ秋より小鳥のま

三叉物 氷魚

此氷魚といふもの江湖の  
名産ありて他州ふあり伊勢江戸の江  
ふあり白魚より勝て潔白ありものあり江州田上及び  
宇治川は細代と打てこきと取堅田あり 摺網を以て

氷魚の使

延喜式 山城国近江國氷魚網  
取り 代一處其氷魚九月より十二月

小いさまで貢之云々 氷面鏡 藻塩草 紐鏡と  
それと氷魚の使らふ 書氷のつもの  
如くあり 火鉢 火桶 桐火桶 枕草紙 人の家ふ  
とつら

竹篙をよぎたる火桶云々 古制の圖とてその内真  
鍮等のものもて張外ハ桐の木とくうると室とハ或  
ハ木地或ハ箔ふた其上ふ 餅 字彙餅 一文字  
彩色の絵を書き物 葱あり板の 干葉釣 や菜とつふ  
部とつら 十一月

日吉祭 中の申の日の一年ふ兩度あり 夏の  
ひの部とつら 平

野祭 上の申の一年ふ兩度あり 日吉臨時  
夏の部とつら

祭 中申 公事根元 建曆三年十一月十八日より始  
めて殿上の使と立ち過るる八月より延  
曆寺の衆徒長樂寺より官兵の鳥ふ多く誅せ  
らるる如等の事とてその御願ありとて好

冬 氷も







增補歲時記拜草冬之部終



